

1

平成 26 年度

研究開発実施報告書

～第 2 年次～

北海道教育大学附属札幌小学校

外 7 校

平成 26 年度

研究開発実施報告書

(要約)

～第 2 年次～

北海道教育大学附属札幌小学校

外 7 校

## 平成26年度研究開発学校実施報告書（要約）

### I 研究開発課題

国際社会において主体的に活躍できる英語のコミュニケーション能力を育成するため、小学校に新教科を導入し、4技能を総合的に育成するカリキュラムや指導方法及び評価方法、中学校との円滑な接続の在り方についての研究開発

### II 研究の概要

小学校1学年から新教科「小学校英語科」を導入し、国際社会において主体的に活躍できる英語のコミュニケーション能力と積極的な態度の育成を目指し、次の①～③を研究する。

- ① 「小学校英語科」の情意面及び技能面での目標と評価の在り方
- ② 4技能を総合的に育成する系統的なカリキュラムや文法指導の在り方
- ③ 小中の教師間交流、児童生徒間交流、カリキュラム連携の在り方

中学校では、英語の時間の一部を、小学校との継続的な指導やより高度で発展的な言語活動の時間にあてる「スパイラルタイム」として教育課程内に設定し、英語科における指導計画と指導方法の見直しを研究する。

さらに、ICT機器を利用した個別学習、遠方の仲間や海外の子どもたちとの英語を介した協働学習や交流学習の在り方を研究するとともに、その成果を、いつでもどこからでも誰にでも利用できる蓄積発展型教材としてウェブ上で整備し、その効果的活用を図るための指導方法や評価方法をあわせて開発する。

### III 研究の目的と仮説等

外国語活動が小学校第5学年から導入されたことによる望ましい変化として、「聞く力」が高まっていることを実感している中学校教師は多い。また、英語の発音がよくなっている、語彙が増えている、授業時におけるアクティビティに積極的であるなど、音声面や意欲面での向上も報告されている。

このように外国語活動の導入により、小学生のコミュニケーション能力の素地の育成がなされているが、小学生でも高学年であれば、音声だけではなく、学んだ表現を文字にしてみたい、書かれている英文を読みたい、日本語と英語の違いを文法的側面から知りたい等の知的好奇心が芽生える児童も出てくる。

英語教育改善のための調査研究事業に関するアンケート調査(平成22年10月 文部科学省国際教育課外国語教育推進室)によれば、「英語の授業で楽しいと思うこと」という設問に対し、「英語の文字や単語を読むこと」と答えた児童は小学校6年生で55.1%、「英語の文字や単語を書くこと」と答えた児童は53.4%にあがる。学習者の知的欲求が、「読むこと」「書くこと」につながっていると思われる。

国際社会において主体的に活躍するためには外国語運用リテラシーが必須であるが、その根幹となるのは、異文化への関心であり、異文化をもつ人々と積極的にコミュニケーションを図りたいという意欲である。その意味において、現状の外国語活動は、コミュニケーション意欲の向上に大きく寄与しているが、「話すこと」「聞くこと」中心の活動に、「読むこと」「書くこと」を加え、4技能をバランスよく総合的に育成していくことで、小学校高学年児童の知的好奇心を満足させ、中学校とのより円滑な接続ができるのではないかと考えた。

もちろん、外国語に初めて触れる小学生にとって、「聞くこと」「話すこと」「読むこと」「書くこと」の4技能を同時に習得させることは大きな負担となる。そこで、第1学年から「小学校英語科」を導入することで、段階的に系統的に英語を学ぶことができるように考えた。そのためのカリキュラムや指導方法、

中学校との円滑な接続の在り方についての研究を進めることが、第1の目的である。

さらに、小学校1年生から小学校英語科を導入した場合、中学校に入学してくる子どものコミュニケーション能力は現在よりも向上することになる。受け入れる中学校では、そのコミュニケーション能力をどう引き継ぎ、伸ばしていくか、そのために英語の授業はどうあるべきなのか、指導方法を含めて見直していく必要があるだろう。これが、研究の第2の目的である。

児童生徒の外国語によるコミュニケーション力を育成するには、小学校、中学校それぞれ単独に行われればよいのではない。学習者の学びの一貫性を考えれば、小学校と中学校が指導内容の連続を図り、指導方法に一貫性をもたせ、系統だったカリキュラム連携を考慮する必要がある。それが児童生徒の英語を学ぶモチベーションともなるだろう。そのためにも、まず、小・中学校の教師が交流し、指導方法や内容を共有したり、協力して指導にあたったりするべきである。さらに、児童・生徒の交流により、学びあう様子を通じて互いの学習内容を把握したり、児童生徒の言語習得へのプロセスを理解しあったりするべきである。英語教育における小学校と中学校の円滑な接続を図るための、こうした教師間交流、児童生徒交流の成果を検討していくことが、研究の第3の目的である。このとき、小学校担任のサポートとしてALTの配置の他、学生ボランティアや地域人材の活用方法も併せて求められる。本校が教育大学の附属学校である利点を生かし、こうした人的資源の活用方法や児童生徒の追跡調査等を行うことで、研究成果の深まりを目指していく。

第4の目的は、児童生徒のコミュニケーション力を高めるための指導方法として、学びの場におけるICT活用の効果である。様々な学校種、子どもたちの発達段階を考慮して、一人一台の情報端末や電子黒板、無線LAN等が整備された環境において、デジタル教科書・教材を活用した教育の効果・影響の検証、指導方法の開発、モデル・コンテンツの開発等を行う実証研究をしていく。

## 1 研究仮説

国際社会において主体的に活躍するために求められるコミュニケーション能力は、小学校において新教科「小学校英語科」を導入するとともに、中学校の英語の時間の一部に「スパイラルタイム」を設定し、小・中学校の効果的な連携を図る中で、ICT機器の活用や、仲間との協働学習を効果的に導入しながら、4技能を総合的に育成することで向上する。

課題解決をするために、次の①～④について研究開発を進める。

### ① 新教科「小学校英語科」を導入し、カリキュラム開発を行う

(ア) 小学校新教科「小学校英語科」における目標と評価、カリキュラムの在り方についての研究

(イ) 中学校「スパイラルタイム」における指導方法と指導内容の在り方についての研究

(ウ) 小学校卒業時のCAN-DOリストの作成

### ② 「スノーマン・プロジェクト」を意識した授業づくり

(ア) 課題解決的な手法により「読むこと」「書くこと」を育成するピクトフォリオづくり

(イ) 自らの学びを確認し、他者との協働によって学びの広がりを実感できる蓄積型発展教材（スノーマン）づくり

(ウ) 時間や空間を超えて相手とつながることの楽しさを実感することによる主体的態度の育成

### ③ 英語教育を効果的にすすめる「学びのイノベーション」

(ア) 空間を超えて人とつながる環境（スカイプ、E-mail、インターネット）

(イ) 時間を超えて仲間や先輩の学習成果から学ぶ環境（スノーマン・プロジェクト）

(ウ) 音と文字の関連を一人でも実感できる環境（どきどき！英語変換チャレンジ）

### ④ 効果的な小中連携の在り方

(ア) 効果的な小中の情報交換の在り方

- (イ) 教師間交流，児童生徒間交流の在り方
- (ウ) 効果的な小中接続のためのカリキュラムの在り方

## 2 必要となる教育課程の特例

<p>小学校：新教科「小学校英語科」の新設</p> <p>第1学年及び第2学年を週0.5時間，年間17時間設定する。各教科から時数をあてる。</p> <p>第3学年から第6学年は週1時間，年間35時間設定する。</p> <p>第3学年及び第4学年は各教科，総合的な学習の時間から時数をあてる。</p> <p>第5学年及び第6学年は外国語活動の時間の時数をあてる。</p>
---

## IV 研究内容

### 1 教育課程の内容等

#### (1) 教育課程の内容

##### ① 小学校英語科の目標

小学校英語科の目標は，次のとおりである。

第1学年及び第2学年	第3学年～第6学年
英語を通じて，言語や文化について体感的に理解を深め，積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り，英語の音声や基本的な表現に慣れ親しませながら，コミュニケーション能力の素地を養う。	英語を通じて，言語や文化について体験的に理解を深め，積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り，聞くこと，話すこと，読むこと，書くことなどのコミュニケーション能力の基礎を養う。

##### ② 各学年の目標

各学年における目標は，次のとおりである。

	第1学年及び第2学年	第3学年及び第4学年	第5学年及び第6学年
目 標	言語や文化について体感し，積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り，英語の音声や身近なことを表す表現に慣れ親しませながら，コミュニケーション能力の素地を養う。	言語や文化について体験的に理解を深め，積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り，英語の音声や基本的な表現を身に付けさせながら，コミュニケーション能力の基礎を養う。	言語や文化について体験的に理解を深め，積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り，身に付けた表現を活用させながら，聞くこと，話すこと，読むこと，書くことなどのコミュニケーション能力の基礎を養う。

さらに，前記の各学年の目標を踏まえ，次のように領域別に四つに分けて具体的な目標を設定している。

#### 各学年における各領域の目標

	第1学年及び第2学年	第3学年及び第4学年	第5学年及び第6学年
A 聞くこと	(1) 英語を聞くことに慣れ親しみ，身近なもの・ことを表す英語の意味を理解しようとする態度を養う。	(1) 簡単な英語を聞いて，話し手の好みなどを理解できるようにする。	(1) 初歩的な英語を聞いて，話し手の意向の大体を理解できるようにする。

B 話すこと	(2) 英語を言うことに慣れ親しみ、身近なもの・ことを英語で言ってみようとする態度を養う。	(2) 簡単な英語を用いて、自分の好みなどを話すことができるようにする。	(2) 初歩的な英語を用いて、自分の思いや考え、事実などを話すことができるようにする。
C 読むこと	(3) アルファベットへの興味・関心を高めることができるようにする。	(3) アルファベットを読むことができるようにするとともに、身近なことを表す英語を理解し、声に出して読むことができるようにする。	(3) 身近なことを表す英語を理解し、声に出して読むことができるようにする。
D 書くこと	(4) アルファベットへの興味・関心を高めることができるようにする。	(4) アルファベットを正しく書き、身近なことを表す英語を見ながら書くことができるようにする。	(4) 身近なことを表す英語を見ながら書くことができるようにする。

## (2) 教育課程の内容は適切であったか

小学校に新教科「小学校英語科」を新設し、小学校 1 年生から英語を導入することは適切であり、効果を上げてきているところである。

英語は繰り返し聞いたり話したりすることが大切であり、特に低学年時には物とイメージと英語の音を一致させることが大切であると言われる。日常生活で使用される頻度の高い数字や色、挨拶などの基本的語彙や表現は、低学年から英語を導入することにより、毎回の授業の中で繰り返され、言語の使用場面やイメージとともに、自然と定着していく。

現在、作成を進めている小学校英語科のカリキュラムは、低学年から英語に少しずつ触れていき、覚えた英語を繰り返し活用しながら学習を積み重ね、相手と積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成はもちろん、「聞くこと」「話すこと」「読むこと」「書くこと」などのコミュニケーション能力の基礎を育むことを目指すものである。子どもの発達段階や知的好奇心の高まりに合わせて学習を進めていくことで目標を達成することができるよう、低・中・高学年それぞれの目標を定め、指導内容を設定している。

中学校では現行の教育課程の枠内ではあるが、中学校 1 年生の英語の授業の一部を「スパイラルタイム」と設定し、小学校英語科と指導方法や学習内容の一貫性や共通性を目指したカリキュラムを作成中である。この「スパイラルタイム」は、教科書を離れ、通常の授業以上に content-based を意識して、英語をツールとして使用しながら、自分の思いや相手の考えを受け入れながら活動する時間である。この時、小学校で学んだ内容を想起させ、スパイラルに学び直すことにより、生徒の英語力が向上することがわかってきている。また、教師間交流や児童生徒間交流を中心とした効果的な連携を図る時間としても設定でき、生徒の英語学習へのモチベーションや目的意識を高めることにも有効である。

具体的には、①小学校英語科のカリキュラムに基づき、学習内容の継続性を考慮した中学校における橋渡しの時間にできるよう、中学校 1 年生の最初の 5～6 時間を使ったオリエンテーションとしての活動、②日常生活における意味のあるやりとりを中心としたコミュニケーション活動やコミュニケーション・ストラテジーの育成を狙った帯的活動、③中学校終了段階で、討論やディベートなどの高等学校の学習内容を含めたコミュニケーションの機会をもたせるための発展的な内容の活動、④英語での自己紹介活動を小学生と交流したり、小学生へのビデオレターを作成したり、他地域の中学生や異文化をもつ人々と音声を中心として交流したりする等の活動を設定している。

### (3) 授業時間等についての工夫

授業時数の工夫については、今後さらに検討が必要である。

### (4) 小学校における指導方法の適切性

各小学校で新カリキュラムの実践を行うための指導方法や教材等については、代表的な実践例を取り上げていくと、次のように整理することができた。

#### <① 学習への一層の動機づけを図る活動構成>

授業の導入の工夫や、目的意識をもった活動の設定、学んだ言葉を使った交流とその成果を実感できるようにするための場の設定、学習の流れの提示と英語を活用する場の設定、インフォメーション・ギャップを利用した活動の設定などにおいて、学習への一層の動機づけを図っている。

#### <② ゲーム性のある各種活動の設定>

英語そのものへの興味・関心を喚起し、英語に慣れたり、コミュニケーションを図る楽しさを味わったりすることができるようになってきている。

#### <③ コミュニケーションを支える技能を自然に身に付けるための指導>

小学校高学年では、英語を読んだり書いたりしてみたいという思いや願いも強くなっていく。文字を介したコミュニケーションを支える技能を自然と身に付けるような指導が効果的である。

#### <④ 学習への一層の動機づけを図る教材の用意>

絵本は絵と文字があってイメージを想起しやすく、音読も工夫することが可能であるため、子どもの学習への動機づけを図るには絶好の教材である。

### (5) 中学校における指導方法の適切性

中学校においては、英語をツールとして使用しながら、自分の思いや相手の考えを受け入れながら活動する時間であるスパイラルタイムにおいては、以下のような指導方法を取り入れている。

#### <① CS (Communication Strategy) Training>

パラフレーズする力を伸ばすウォームアップ活動である。この活動は、小学校の共通カリキュラムにも組み込まれている方略的能力の育成を中学校で引き継ぎ発展させようとするものである。自分が伝えたい語彙が想起できないときや相手が理解できないときに、それに代わる語彙を使って表現する能力を高める指導方法である。

#### <② PWIM>

呼んだ内容をリプロダクトする活動は、Reading と Writing のつながりを強めたり、コミュニケーションスキルを高めたりするために有効な指導方法である。

#### <③ Creative Situation Skit>

コミュニケーションにおいては、言語はある具体的な場面において具体的な働きを果たすために使用されるものであることを子どもたちに理解させるために有効な手立てである。

#### <④ Dictogloss>

小学校英語科とのつながりを意識し、「意味内容そのものに対する問い」を生むと同時に、中学生らしい英語表現の高まりを意識し、文法規則など「言語そのものに対する問い」も生むことができる。意味のある、かつ、取得したいと思う情報を与えられたときに、学習者は、仲間と協力して語彙や文構造に着目し、理解を深めると同時に、モニタリング能力の向上が図られる。

## (6) ICT 機器等の活用について

その他、小学校、中学校共通した教材として、ICT の活用を図っている。

### <① わくわくスノーマン・プロジェクト>

自分の学校にいながら様々な人とのつながりを意識し、コミュニケーションへの意欲を高める手立てとして、学習成果を蓄積型発展教材としてデータベース化する「わくわく！スノーマン・プロジェクト」を用意した。これにより、子どもの文字への関心を引き出すとともに、「読むこと」「書くこと」に取り組む意欲をもたせ、他者との協働学習による学びの広がりを実感させ、動機づけと異文化理解を促している。

### <② ときどき変換チャレンジ>

発音に対する意識付けとしては有効である。しかし、あくまでも機械判定であるため、音声の一面的な判定にしか過ぎないことに留意する必要がある。

### <③ タブレット端末の利用>

個別学習時におけるタブレット型端末の利用は、様々に考えられる。この時、その効果とともに指導場面と指導方法が合致しているのか十分に検討する必要がある。習熟度に応じての学びの可能性が広がるが、一方、集団の機能を生かした学びにはならない場合があるためである。

### <④ CAN-DO リストの利用>

中学入学時の早い時期から、多様な小学校から入学してくる生徒の英語の運用能力を統一したラインで図ることができ、その後の指導計画に反映することができ有効である。今後は、各学年の CAN-DO リストを利用しての指導はどうあるべきかを検討する必要がある。

## 2 研究の経過

年次	研究推進内容
<第一年次>	(1) 北海道教育大学英語教育プロジェクト会議（年4回） (2) 新教科「小学校英語科」の教育課程上の位置付けの検討 (3) 新教科「小学校英語科」の目標設定とカリキュラム作成 (4) 新教科「小学校英語科」評価の在り方の検討と CAN-DO リストの作成 (5) 新教科「小学校英語科」を導入後の中学校英語の目標と指導計画の見直し (6) 児童生徒実態調査（関心・意欲・態度）の実施 (7) 附属小学校・中学校間における児童生徒間交流・教師間交流の開始 (8) 「わくわく！スノーマン・プロジェクト」プレ運用開始 (9) 「ときどき！英語変換チャレンジ」実施 (10) 「スパイラルタイム」のカリキュラム開発 (11) 文字習得状況調査（中学1年・5月）の実施 (12) 評価委員会による評価の実施と次年度の方向性の検討 (13) 中学校・高等学校間の効果的な連携の在り方について検討
<第二年次>	(1) 北海道教育大学英語教育プロジェクト会議（年4回） (2) 小学校第1学年からの「小学校英語科」の実施 (3) 附属小学校・中学校間における児童生徒間交流の継続／海外との交流活動 (4) 附属小学校・中学校間における教師間交流の継続（年4回） (5) 1年次研究成果の評価／中学校英語の目標再設定 (6) 「わくわく！スノーマン・プロジェクト」の本格実施 (7) 「ときどき！英語変換チャレンジ」の継続 (8) 「スパイラルタイム」の実践 (9) 文字習得状況調査（中学1年・5月）の実施 (10) 児童生徒実態調査（関心・意欲・態度）の実施と研究へのフィードバック (11) 評価委員会による評価と次年度の方向性の検討



<p>＜第三年次＞</p>	<p>(1) 北海道教育大学英語教育プロジェクト会議（年4回）  (2) CAN-DO リストによる評価の一部実施と見直し  (3) 小学生が習得する基礎的文法事項の習得状況調査と効果の測定  (4) 中間評価（成果の確認と修正）  (5) 附属小学校・中学校間における児童生徒間交流の継続／海外との交流活動  (6) 附属小学校・中学校間における教師間交流の継続（年4回）  (7) 接続を意識した小学校と中学校のカリキュラムの見直し  (8) 「わくわく！スノーマン・プロジェクト」継続  (9) 「どきどき！英語変換チャレンジ」継続  (10) 「スパイラルタイム」の実践継続  (11) 文字習得状況調査（中学1年・5月）の実施  (12) 児童生徒実態調査（関心・意欲・態度）の実施と研究へのフィードバック  (13) 評価委員会による評価と次年度の方針の検討</p>
<p>＜第四年次＞</p>	<p>(1) 北海道教育大学英語教育プロジェクト会議（年4回）  (2) 附属小学校・中学校間における児童生徒間交流の継続／海外との交流活動  (3) 附属小学校・中学校間における教師間交流の継続（年4回）  (4) 「わくわく！スノーマン・プロジェクト」完成  (5) 研究の成果と効果の検証</p>

### 3 評価に関する取組

年次	評価推進内容
<p>＜第一年次＞</p>	<p>(1) 児童生徒の実態調査（4月、2月 小学校6年生及び中学1年生）  (2) 児童英検をもちいた英語の理解力診断（2月 小学校6年生）  (3) 学力テストをもちいた英語力の診断（8月 中学校1年生）  (4) 振り返りカードによる情意面の見取り（6月～）  (5) 上記（1）～（4）の評価をもとにしたカリキュラムの検証</p>
<p>＜第二年次＞</p>	<p>(1) 児童生徒の実態調査（4月、2月 小学校6年生及び中学1年生）  (2) 児童英検をもちいた英語の理解力診断（2月 小学校5・6年生）  (3) パフォーマンステストをもちいた英語力の診断（3月 中学校1・2年生）  (4) 振り返りカードによる情意面の見取り（6月～）  (5) 上記（1）～（4）の評価をもとにしたカリキュラムの検証</p>
<p>＜第三年次＞</p>	<p>(1) 児童生徒の実態調査（4月、2月 小学校6年生及び中学1年生）  (2) 児童英検をもちいた英語の理解力診断（2月 小学校5・6年生）  (3) パフォーマンステストをもちいた英語力の診断（8月 中学校）  (4) 振り返りカードによる情意面の見取り（6月～）  (5) 上記（1）～（4）の評価をもとにしたカリキュラムの検証</p>
<p>＜第四年次＞</p>	<p>(1) 児童生徒の実態調査（4月、2月 小学校6年生及び中学1年生）  (2) 児童英検をもちいた英語の理解力診断（2月 小学校5・6年生）  (3) パフォーマンステストをもちいた英語力の診断（8月 中学校）  (4) 振り返りカードによる情意面の見取り（6月～）  (5) 上記（1）～（4）の評価をもとにした4年間の成果の検証（11月）</p>

## V 研究開発の成果

### 1 実施による効果

#### （1）児童・生徒への効果

低学年への英語導入の最も大きな効果は、英単語のもつ意味をイメージで捉えさせることができることにある。札幌小では、新しい単語を学ぶ際に、英語の音声とともにピクチャーカードや具体物を表示し、音声と対象をつなげていく試みを行った。日本語の意味を伝えずとも、絵を表示しながら英語の音声を聞かせることで、ダイレクトに英語の音とイメージがつながり、絵や写真を見てすぐに eggplant や potato という言葉が出てくるなど、言葉に対する反応が速くなった。言葉と音声のつながりは、発話の手助けになると考える。

高学年では、インフォメーション・ギャップを利用した活動を行う中で、自分のもっている情報と異なる情報が手に入り、求めているものに辿り着いていくことへの楽しさや、そのためにコミュニケーション

を図ることへの楽しさに目を向ける傾向があった。また特定の英語表現を多数の友達との交流の中で何度も使うことで自分のものにすることができたという実感を発表する子どもが多い。さらにその時間で学んだ英語を、生かせそうな他の活動や場面を考えて発表する子どももいた。

一方、中学校では、小・中学校の円滑な接続を意識して導入したスパイラルタイムにおいて、日常の学習の成果を実感できることが英語学習への動機づけにつながるということがわかる。身につけた表現を想起しながら進めるスパイラル的学習の成果を発揮できる場面を設定することで、学習者の意欲の高まりを効果的に導きだせることが小中連携の中でも見とることができた。

これらの結果から、スパイラルタイムを取り入れ、小学校英語科での学習を活かしつつ、小中の学習のつながりを意識させながら、自分の考えや思いといった内容のあるコミュニケーション活動を単元構成に組み込むことで、英語を使うことに自信をもてる生徒の育成につながっていると考える。

## (2) 教師への効果

小学校1年生からの導入を図ることにより、小学校教員全員が英語に関わることとなり、学校全体として英語をどう位置づけ、どう指導していくかという論議が生まれるようになる。また、研究を積極的にすすめることにより、児童がより一層楽しく活動するようになり、その姿によって教師の指導意欲も高まってきた。

中学校においては、教育課程内ではあるものの、「スパイラルタイム」を設定することにより、教科書を離れ、通常の授業以上に content-based を意識して、英語をツールとして使用しながら、自分の思いや相手の考えを受け入れながら活動する時間として、意識して活用するようになってきている。

## (3) 保護者等への効果

保護者の期待感は大い。特に、小学校英語が導入されるという報道等がなされるたびに、現在行っている研究内容に対して、関心と理解が深まっている。

## 2 実施上の問題点と今後の課題

小学校英語科を進めていく中で、低学年で年間17時間という授業時数の中で教科としてどれだけのことができるのか、という問題が明らかになってきている。年間17時間という限られた時間の中では、扱う内容の定着を図ることや、評価を行うことが難しいのではという意見や指導助言をいただいている。それらを鑑み、次年度は低学年と中・高学年の目標や評価の在り方を再度見直し、低学年では「英語を通じて、言語や文化について体感的に理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、英語の音声や基本的な表現に慣れ親しませながら、コミュニケーション能力の素地を養う」ことを目標とし、中・高学年では「英語を通じて、言語や文化について体験的に理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、聞くこと、話すこと、読むこと、書くことなどのコミュニケーション能力の基礎を養う」ことを目標として再設定する。

誰が指導するのも問題の一つである。現在、担任が指導している学校からは、高学年の指導は、やはりより専門的な知識をもった教員が指導していく方がよいという意見が出ている。その一方、すでに専科英語担当教員が指導にあたっている函館小学校では、逆に、普段の子どもたちの様子を知り、生活の中で指導をしていける担任が行うメリットに目を向け、担任が指導することを検討中である。どちらにも一長一短があり、結論はついていない。

担任が中心になって進める英語の学習では、ネイティブにより近い音声をどのように子どもに与えていくかが課題となっている。担任が指導する場合でもネイティブにより近い音声を確保するため、現在は大学で開発した音声教材を使用している。

人的整備の他、物的整備も必要となる。小学校英語科の指導をできるようにするための条件を整備するため、現在、英語プロジェクトとして、学習指導要領相当資料、小学校卒業時の CAN-DO リスト、各学年のカリキュラム、学習指導案（単元計画）と教科書相当教材、小学校英語科用各種教具の作成・制作を、大学と附属小学校が協力しながら進めているところである。現在運用中のカリキュラムについては精査を進め、言語の機能という視点でカリキュラムの軸が定まりつつある段階である。

中学校においては、受け入れ態勢の問題がある。現在、小学校英語科において、学習指導要領相当の資料やカリキュラムの策定、授業計画づくりが進んでいる。これにより、小学校卒業段階でどんな力をどの程度定着させたいのかを CAN-DO リストの形で示すことができると考える。したがって、中学校において作成している CAN-DO リストは、その姿によって変更を加えていく必要がある。また、CAN-DO リストのディスクリプタが、実際の授業や生徒の変容などを踏まえたときに、どれだけ妥当性をもっているかを検証していかなければならない。加えて、英語によるプレゼンテーション力について、例えば発表姿勢や意欲・表現における向上のエビデンスをどう示すかという検討も必要である。次年度研究では、小学校で学習してきた文字や文法事項等を踏まえた習得状況を的確に把握し、内容的に深化させたカリキュラムと言語の運用能力をどこまで高めていくのか CAN-DO リストの再検討を進めていく。

スパイラルタイムについては、各校でいろいろな実践を積み上げてきたが、CAN-DO リストに基づいたオリエンテーションとしての指導では、昨年度のデータにおいても附属小出身と公立小出身の生徒の差がある程度埋めることができることを確認した。また、帯的な活動やディクトグロス、異校種間の連携などについても、各校の実態を踏まえて「即時性」のあるやりとりができるような活動のフレームを検証することもできた。今後は、これらの実践を整理し、どの学校でも共通して使えるようなものにしていくことや、生徒がさらに「即時性」のあるやりとりをすることができるようにするための教材開発、加えて、年間指導計画の中に適切に効果的にスパイラルタイムを位置付けていくことも必要である。

ICT を活用にかかわっては、7月初旬、附属札幌中学校の2年生と附属旭川中学校の1年生が iPad にインストールされてあるアプリ「Face Time」による自己紹介でのやりとりを実施した。インターネットを利用するための環境が悪く、思うような学習成果を得ることができなかった。しかし、学習後の振り返りでは、ほぼ 100%の生徒がこのような学習をまたやってみたいと評価していた。インターネットを利用するための環境や ICT 機器の整備・充実が一層求められる。今後は、ICT を積極的に活用した授業と小小、小中、中中連携の授業実践を積み重ね、その成果をカリキュラムの中に位置付けていくことが肝要であると考えている。

## 北海道教育大学附属札幌小学校（外 3小学校） 教育課程表（平成26年度）

	各教科の授業時数									道徳	外国語活動	総合的学習的な時間	特別活動	小学校英語科	総授業時数
	国語	社会	算数	理科	生活	音楽	図画工作	家庭	体育						
第1学年	300 (-6)		133 (-3)		100 (-2)	66 (-2)	66 (-2)		100 (-2)	34			34	17 (+17)	850 (0)
第2学年	309 (-6)		172 (-3)		103 (-2)	68 (-2)	68 (-2)		103 (-2)	35			35	17 (+17)	910 (0)
第3学年	235 (-10)	67 (-3)	172 (-3)	87 (-3)		56 (-4)	56 (-4)		102 (-3)	35		65 (-5)	35	35 (+35)	945 (0)
第4学年	235 (-10)	87 (-3)	172 (-3)	102 (-3)		56 (-4)	56 (-4)		102 (-3)	35		65 (-5)	35	35 (+35)	980 (0)
第5学年	175	100	175	105		50	50	60	90	35	0 (-35)	70	35	35 (+35)	980 (0)
第6学年	175	105	175	105		50	50	55	90	35	0 (-35)	70	35	35 (+35)	980 (0)
計	1429 (-32)	359 (-6)	999 (-12)	399 (-6)	203 (-4)	346 (-12)	346 (-12)	115	587 (-10)	209	0 (-70)	270 (-10)	209	174 (+174)	5645 (0)

※授業時数、単位数の増減等については、表中に記号を付けたリゴシック体で示すなど、教育課程の基準との対比が明確になるよう記載すること。

・新教科（英語）では、他教科で扱う内容についてその一部を扱うこととし、減時数分の内容を担うこととする。

例えば、国語で担っている話すこと・聞くことのうちのコミュニケーションの基礎、算数における数の基本や図形、時間、音楽における歌唱やリズム遊び、図画工作における造形活動、体育における身体表現、生活科における遊びや学校で働く人たち、理科における動植物の名前、社会科における地域の地名やお店の仕事などの内容である。

## 北海道教育大学附属札幌中学校（外 3中学校） 教育課程表（平成26年度）

	各教科の授業時数									道 徳	総 学的 習 的 な 時 間	特 別 活 動	総 授 業 時 数
	国 語	社 会	数 学	理 科	音 楽	美 術	保 健 体 育	技 術 家 庭	外 国 語				
第1学年	140	105	140	105	45	45	105	70	140	35	50	35	1015
第2学年	140	105	105	140	35	35	105	70	140	35	70	35	1015
第3学年	105	140	140	140	35	35	105	35	140	35	70	35	1015
計	385	350	385	385	115	115	315	175	420	105	190	105	3045

※授業時数，単位数の増減等については，表中に記号を付けたリゴシック体で示すなど，教育課程の基準との対比が明確になるよう記載すること。

・各学年において，外国語の時間の一部を小学校との継続的な指導の時間にあてる「スパイラルタイム」として教育課程内に設定する。

## 学校等の概要1

## 1 学校名、校長名

ホッカイドウキョウイクダイガクフソクサツポロシヨウガッコウ  
北海道教育大学附属札幌小学校 校長 戸田 まり

## 2 所在地、電話番号、FAX番号

所在地 北海道札幌市北区あいの里5条3丁目1-10  
電話 011-778-0471 FAX 011-778-0640

## 3 課程・学科・学年別幼児・児童・生徒数、学級数

第1学年		第2学年		第3学年		第4学年		第5学年		第6学年		計	
児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数
70	2	70	2	72	2	76	2	79	2	78	2	445	12
3		3	1	2		3	1	3		4	1	18	3

(下段は特別支援学級、2学年で1学級)

## 4 教職員数

校長	副校長	教頭	主幹教諭	指導教諭	教諭	助教諭	養護教諭	養護助教諭	栄養教諭	講師
1	1	0	1	0	18	0	1	0	1	8
ALT	スクールカウンセラー	事務職員	司書	計						
2	1	4	0	38						

## 学校等の概要2

## 1 学校名、校長名

ホッカイドウキョウイクダイガクフソクハコダテシヨウガッコウ  
北海道教育大学附属函館小学校 校長 根本 直樹

## 2 所在地、電話番号、FAX番号

所在地 北海道函館市美原3丁目48番6号  
電話 0138-46-2235 FAX 0138-47-7376

## 3 課程・学科・学年別幼児・児童・生徒数、学級数

第1学年		第2学年		第3学年		第4学年		第5学年		第6学年		計	
児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数
69	2	69	2	76	2	77	2	77	2	76	2	444	12

## 4 教職員数

校長	副校長	教頭	主幹教諭	指導教諭	教諭	助教諭	養護教諭	養護助教諭	栄養教諭	講師
1	1	0	1	0	14	0	1	0	0	4
ALT	スクールカウンセラー	事務職員	司書	計						
0	1	5	0	28						

## 学校等の概要3

## 1 学校名、校長名

ホッカイドウキョウイクダイガクフソクアサヒカワシヨウガッコウ  
北海道教育大学附属旭川小学校 校長 岡田 みゆき

## 2 所在地、電話番号、FAX番号

所在地 北海道旭川市春光4条1丁目1番1号  
電話 0166-52-2361 FAX 0166-52-2363

## 3 課程・学科・学年別幼児・児童・生徒数、学級数

第1学年		第2学年		第3学年		第4学年		第5学年		第6学年		計	
児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数
74	2	63	2	73	2	70	2	70	2	69	2	418	12

## 4 教職員数

校長	副校長	教頭	主幹教諭	指導教諭	教諭	助教諭	養護教諭	養護助教諭	栄養教諭	講師
1	1	0	1	0	15	0	1	0	1	8
ALT	スクールカウンセラー	事務職員	司書	計						
2	1	3	0	34						

## 学校等の概要4

## 1 学校名、校長名

ホッカイドウキョウイクダイガクフゾククシロシヨウガッコウ

北海道教育大学附属釧路小学校 校長 村山 昌央

## 2 所在地、電話番号、FAX番号

所在地 北海道桜ヶ岡7丁目12番48号

電話 0154-91-6322

FAX 0154-91-6324

## 3 課程・学科・学年別幼児・児童・生徒数、学級数

第1学年		第2学年		第3学年		第4学年		第5学年		第6学年		計	
児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数
66	2	65	2	70	2	68	2	74	2	68	2	411	12

## 4 教職員数

校長	副校長	教頭	主幹教諭	指導教諭	教諭	助教諭	養護教諭	養護助教諭	栄養教諭	講師
1	1	0	1	0	14	0	1	0	1	4
ALT	スクールカウンセラー	事務職員	司書	計						
1	0	3	0	27						

## 学校等の概要5

## 1 学校名、校長名

ホッカイトウキョウイクダイガクフゾククサッポロチュウガッコウ

北海道教育大学附属札幌中学校 校長 佐藤 昌彦

## 2 所在地、電話番号、FAX番号

所在地 北海道札幌市北区あいの里5条3丁目1-11

電話 011-778-0471

FAX 011-778-0483

## 3 課程・学科・学年別幼児・児童・生徒数、学級数

第1学年		第2学年		第3学年		計	
生徒数	学級数	生徒数	学級数	生徒数	学級数	生徒数	学級数
108	3	125	3	125	3	358	9
8	1	6	1	8	1	22	3

(下段は特別支援学級、2学年で1学級)

## 4 教職員数

校長	副校長	教頭	主幹教諭	指導教諭	教諭	助教諭	養護教諭	養護助教諭	栄養教諭	講師
1	1	0	1	0	20	0	2	0	0	7
ALT	スクールカウンセラー	事務職員	司書	計						
2	1	3	0	38						

## 学校等の概要6

## 1 学校名、校長名

ホッカイドウキョウイクダイガクフゾクハコダテチュウガッコウ

北海道教育大学附属函館中学校 校長 羽根田 秀実

## 2 所在地、電話番号、FAX番号

所在地 北海道函館市美原3丁目48番6号

電話 0138-46-2233

FAX 0138-47-6769

## 3 課程・学科・学年別幼児・児童・生徒数、学級数

第1学年		第2学年		第3学年		計	
生徒数	学級数	生徒数	学級数	生徒数	学級数	生徒数	学級数
107	3	117	3	118	3	342	9

## 4 教職員数

校長	副校長	教頭	主幹教諭	指導教諭	教諭	助教諭	養護教諭	養護助教諭	栄養教諭	講師
1	1	0	1	0	14	0	1	0	0	7
ALT	スクールカウンセラー	事務職員	司書	計						
1	1	3	0	30						

## 学校等の概要7

## 1 学校名、校長名

ホッカイドウキョウイクダイガクフソクアサヒカワチュウガッコウ  
北海道教育大学附属旭川中学校 校長 安藤 秀俊

## 2 所在地、電話番号、FAX番号

所在地 北海道旭川市春光4条2丁目1番1号  
電話 0166-53-2751 FAX 0166-53-2861

## 3 課程・学科・学年別幼児・児童・生徒数、学級数

第1学年		第2学年		第3学年		計	
生徒数	学級数	生徒数	学級数	生徒数	学級数	生徒数	学級数
113	3	123	3	117	3	353	9

## 4 教職員数

校長	副校長	教頭	主幹教諭	指導教諭	教諭	助教諭	養護教諭	養護助教諭	栄養教諭	講師
1	1	0	1	0	14	0	1	0	0	7
ALT	スクールカウンセラー	事務職員	司書	計						
1	2	3	0	31						

## 学校等の概要8

## 1 学校名、校長名

ホッカイドウキョウイクダイガクフソクシロチュウガッコウ  
北海道教育大学附属釧路中学校 校長 杉山 佳彦

## 2 所在地、電話番号、FAX番号

所在地 北海道釧路市桜ヶ岡7丁目12番2号  
電話 0154-91-6857 FAX 0154-91-6812

## 3 課程・学科・学年別幼児・児童・生徒数、学級数

第1学年		第2学年		第3学年		計	
生徒数	学級数	生徒数	学級数	生徒数	学級数	生徒数	学級数
102	3	102	3	107	3	311	9

## 4 教職員数

校長	副校長	教頭	主幹教諭	指導教諭	教諭	助教諭	養護教諭	養護助教諭	栄養教諭	講師
1	1	0	1	0	14	0	1	0	0	4
ALT	スクールカウンセラー	事務職員	司書	計						
0	0	3	0	25						



平成 26 年度

研究開発実施報告書

～第 2 年次～

北海道教育大学附属札幌小学校

外 7 校

## 平成26年度研究開発学校実施報告書

### I 研究開発の概要

#### 1 研究開発課題

国際社会において主体的に活躍できる英語のコミュニケーション能力を育成するため、小学校に新教科を導入し、4技能を総合的に育成するカリキュラムや指導方法及び評価方法、中学校との円滑な接続の在り方についての研究開発

#### 2 研究の概要

小学校第1学年から新教科「小学校英語科」を導入し、国際社会において主体的に活躍できる英語のコミュニケーション能力と積極的な態度の育成を目指す。具体的には、

- ① 「小学校英語科」の情意面及び技能面での目標と評価の在り方
- ② 4技能を総合的に育成する系統的なカリキュラムや文法指導の在り方
- ③ 小中の教師間交流、児童生徒間交流、カリキュラム連携の在り方

を研究する。

中学校では、英語の時間の一部を、小学校との継続的な指導やより高度で発展的な言語活動の時間にあてる「スパイラルタイム」として教育課程内に設定し、英語科における指導計画と指導方法の見直しを研究する。

さらに、小・中学校ともに英語学習における「学びのイノベーション」を目指し、ICT機器を利用した個別学習、遠方の仲間や海外の子どもたちとの英語を介した協働学習や交流学习の在り方を研究するとともに、その成果を、いつでもどこからでも誰にでも利用できる蓄積発展型教材としてウェブ上でデータベース化し、その効果的活用を図るための指導方法や評価方法をあわせて開発する。

#### 3 研究の目的と仮説等

##### (1) 現状の分析と研究の目的

外国語活動が小学校第5学年から導入されたことによる望ましい変化として、「聞く力」が高まっていることを実感している中学校教師は多い。また、英語の発音がよくなっている、語彙が増えている、授業時におけるアクティビティに積極的であるなど、音声面や意欲面での向上も報告されている。

このように外国語活動の導入により、小学生のコミュニケーション能力の素地の育成がなされているが、小学生でも高学年であれば、音声だけではなく、学んだ表現を文字で書いてみたい、書かれている英文を読んでみたい等の知的好奇心が芽生える児童も出てくる。

英語教育改善のための調査研究事業に関するアンケート調査（平成22年10月 文部科学省国際教育課外国語教育推進室）によれば、「英語の授業で楽しいと思うこと」という設問に対し、「英語の文字や単語を読むこと」と答えた児童は小学校6年生で55.1%、「英語の文字や単語を書くこと」と答えた児童は53.4%にあがる。学習者の知的欲求が、「読むこと」「書くこと」につながっていると思われる。

国際社会において主体的に活躍するためには外国語を運用する能力が必須であるが、その根幹となるのは、異文化への関心であり、異文化をもつ人々と積極的にコミュニケーションを図りたいという意欲である。その意味において、現状の外国語活動は、コミュニケーション意欲の向上に大きく寄与している。しかし、一方、コミュニケーション能力の育成のためには、言語や非言語のあらゆる手段を場面や状況に応じて使い分けながら、相手の気持ちや考え、思いなどを伝え合う経験を積み重ねる必要もある。したがっ

て、児童生徒の発達段階に合った言語活動の場を設定し、英語の語彙・表現を活用しながら「聞くこと」「話すこと」「読むこと」「書くこと」などのコミュニケーション能力の基礎を養うことも不可欠である。

もちろん、外国語に初めて触れる小学生にとって、「聞くこと」「話すこと」「読むこと」「書くこと」の4技能を同時に習得させることは大きな負担となる。そこで、第1学年から「小学校英語科」を導入することで、段階的に系統的に学習できるように考えた。そのためのカリキュラムや指導方法、中学校との円滑な接続の在り方についての研究を進める必要がある。これが研究の第1の目的である。

「小学校英語科」を導入し、6年間を通して培われたコミュニケーション能力の素地を十分に生かすためには、中学校の英語の授業はどうあるべきなのか、指導方法を含めて見直していく。これが、研究の第2の目的である。

児童生徒の外国語によるコミュニケーション能力を育成するには、小学校、中学校それぞれ単独に行われればよいのではない。学習者の学びの一貫性を考えれば、小学校と中学校が指導内容の連続を図り指導方法に一貫性をもたせ、系統だったカリキュラム連携を考慮する必要がある。そのためにも、まず、指導方法や内容を共有したり、協力して指導にあたるなどの教師間交流、児童生徒の学びの様子を通じて互いの学習内容を把握したり、児童生徒の言語習得への動機づけを図るための児童生徒間交流の在り方を研究することで、英語教育における小学校と中学校の円滑な接続を図ることが今、何よりも求められている。これが研究の第3の目的である。

第4の目的は、児童生徒のコミュニケーション能力を高めるための指導方法として、学びの場におけるICT活用である。様々な学校種、子どもたちの発達段階を考慮して、一人一台の情報端末や電子黒板、無線LAN等が整備された環境において、デジタル教科書・教材を活用した教育の効果・影響の検証、指導方法の開発、モデル・コンテンツの開発等を行う実証的研究をしていく。

## (2) 研究仮説

国際社会において主体的に活躍するために求められるコミュニケーション能力は、小学校において新教科「小学校英語科」を導入するとともに、中学校の英語の時間の一部に「スパイラルタイム」を設定し、小・中学校の効果的な連携を図る中で、ICT機器の活用や、仲間との協働学習を効果的に導入しながら、4技能を総合的に育成することで向上する。

課題解決をするために、次の①～④について研究開発を進める。

- ① 「小学校英語科」を新設し、小学校第1学年から英語を導入することで、言語や文化についての体験的な理解と積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を重視しながら、「読むこと」「書くこと」を含めた4技能を総合的に育むことにより、国際社会において主体的に活躍するために求められるコミュニケーション能力を育成することができる。
- ② 小学校で培った英語によるコミュニケーション能力が中学校でも引き継がれるよう、中学校において英語の授業の一部に「スパイラルタイム」を設定し、指導方法や学習内容の一貫性や共通性を目指したカリキュラムを作成し、教師間交流、児童生徒間交流を中心とした効果的な連携を図ることで、生徒の英語学習へのモチベーションや目的意識が高まり、コミュニケーション能力が向上する。
- ③ 国際社会において主体的に活躍するために求められる、異なる国や文化の人々と外国語をツールとして円滑にコミュニケーションを図る態度は、「学びのイノベーション」としてICT機器を積極的に活用し、遠方に住む子どもや異文化の子どもたちとの協働学習を通じて育まれる。また、学習成果を蓄積型発展教材としてデータベース化する「わくわく！スノーマン・プロジェクト」は、子どもの文字への関心を引き出すとともに、「読むこと」「書くこと」に取り組む意欲につながり、他者との協働学習による学びの広がりを実感させ、英語学習の動機づけと異文化理解を促す契機となり、主体的にコミュニケー

ションを図ろうとする態度の育成につながる。

### (3) 研究内容

- ① 新教科「小学校英語科」を導入し、カリキュラム開発を行う
  - (ア) 小学校新教科「小学校英語科」における目標と評価、カリキュラムの在り方についての研究
  - (イ) 中学校「スパイラルタイム」における指導方法と指導内容の在り方についての研究
  - (ウ) 小学校卒業時の CAN-DO リストの作成
- ② 「スノーマン・プロジェクト」を意識した授業づくり
  - (ア) 課題解決的な手法により「読むこと」「書くこと」を育成するピクトフォリオづくり
  - (イ) 自らの学びを確認し、他者との協働によって学びの広がりを実感できる蓄積型発展教材づくり
  - (ウ) 時間や空間を超えて相手とつながることの楽しさを実感することによる主体的態度の育成
- ③ 英語教育を効果的にすすめる「学びのイノベーション」
  - (ア) 空間を超えて人とつながる環境（スカイプ、E-mail、インターネット）
  - (イ) 時間を超えて仲間や先輩の学習成果から学ぶ環境（インターネット）
  - (ウ) 音と文字の関連を一人でも実感できる環境（どきどき！英語変換チャレンジ）
- ④ 効果的な小中連携の在り方
  - (ア) 効果的な小中の情報交換の在り方
  - (イ) 教師間交流、児童生徒間交流の在り方
  - (ウ) 効果的な小中接続のためのカリキュラムの在り方

### (4) 必要となる教育課程の特例

小学校：新教科「小学校英語科」の新設

第1学年及び第2学年は週0.5時間、年間17時間設定する。各教科から時数をあてる。

第3学年から第6学年は週1時間、年間35時間設定する。

第3学年及び第4学年は各教科、総合的な学習の時間から時数をあてる。

第5学年及び第6学年は外国語活動の時間の時数をあてる。

### (5) 研究成果の評価方法

#### ① 測定方法

- (ア) 小学校卒業時における児童英検 GOLD グレードレベルの調査の実施  
小学校卒業時に、「日本英語検定協会」主催の児童英検 GOLD グレードクラスの学力が身に付いているかどうか評価する。 (研究仮説①③の測定)
- (イ) 中学校英語学習初期の段階における文字習得状況調査  
文字を取り扱わない小学校外国語活動で学んできた生徒と「書くこと」を取り入れた小学校英語科で学んできた生徒の文字習得状況の違いを、中学校入学後2ヶ月を経た段階での単語テストにより調査する。 (研究仮説①③の測定)
- (ウ) 児童生徒へのアンケートによる評価  
「小学校英語科」「スパイラルタイム」の学習者の心理面への効果を、コミュニケーションへの意欲や言語や文化への関心の点からアンケート調査する。 (研究仮説①②③の測定)
- (エ) 中学校における発表力・表現力の状況調査  
現行中学校英語教科書には、「発表しよう」「紹介しよう」「スピーチしよう」などの、英語によるプレゼンテーションを扱った題材が多く見られる。英語によるプレゼンテーション活動の状況を

通じて、発表姿勢や意欲、使用される表現において、どのような力が付いているかを調査する。  
(研究仮説①②③の測定)

## ② 見取りの方法

### (ア) 振り返りカードによる評価

授業終了時には、児童生徒一人一人に対して「振り返りカード」を記入させる。これは授業や活動への気づきを児童生徒自身が記入するものである。小学校1年から中学校3年生まで継続的に記録して、変化の様子や学習の深まりを比較する。  
(研究仮説①②の見取り)

### (イ) ポートフォリオとしてのピクトフォリオによる評価

児童生徒一人一人がそれぞれのピクトフォリオを作成し、デジタルコンテンツ化して、ウェブ上にアップロードする。アップロードの際、教師がこのピクトフォリオを事前にチェックして、児童生徒の英語力の向上を調査する。  
(研究仮説③の見取り)

### (ウ) アンケートによる評価

発達段階に応じて「英語への関心・意欲」についてのアンケートを行い、児童生徒の興味・関心のポイントを検証し、授業内容の改善に役立てる。  
(研究仮説①②③の見取り)

## ③ プロジェクトの評価

### (ア) 北海道教育大学附属小・中学校英語プロジェクトによる検討（内部評価）

振り返りカードやアンケート、各種調査による検討を行い、授業の方向性や改善点を検討する。また、本学大学教員による児童・生徒の英語力の分析、教師による授業分析を行い、授業改善に生かしていく。

### (イ) 北海道教育大学附属小・中学校英語プロジェクト評価委員会による検討（外部評価）

評価委員会（文部科学省、北海道教育委員会、札幌市教育委員会関係者で構成予定）を立ち上げ、本研究に対して評価していただき、プロジェクト全体の改善に生かす。

## II 研究開発の内容

### 1 教育課程の内容等

#### (1) 小学校英語科の目標

小学校英語科の目標は、次のとおりである。

第1学年及び第2学年	第3学年～第6学年
英語を通じて、言語や文化について体感的に理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、英語の音声や基本的な表現に慣れ親しませながら、コミュニケーション能力の素地を養う。	英語を通じて、言語や文化について体験的に理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、聞くこと、話すこと、読むこと、書くことなどのコミュニケーション能力の基礎を養う。

## (2) 各学年の目標

各学年における目標は、次のとおりである。

	第1学年及び第2学年	第3学年及び第4学年	第5学年及び第6学年
目標	言語や文化について体感し、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、英語の音声や基本的な表現に慣れ親しませながら、コミュニケーション能力の素地を養う。	言語や文化について体験的に理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、英語の音声や基本的な表現を身に付けさせながら、聞くこと、話すこと、読むこと、書くことなどのコミュニケーション能力の基礎を養う。	言語や文化について体験的に理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、身に付けた表現を活用させながら、聞くこと、話すこと、読むこと、書くことなどのコミュニケーション能力の基礎を養う。

さらに、前記の各学年の目標を踏まえ、次のように領域別に四つに分けて具体的な目標を設定している。

### 各学年における各領域の目標

	第1学年及び第2学年	第3学年及び第4学年	第5学年及び第6学年
A 聞くこと	(1) 英語を聞くことに慣れ親しみ、身近なもの・ことを表す英語の意味を理解しようとする態度を養う。	(1) 簡単な英語を聞いて、話し手の好みなどを理解できるようにする。	(1) 初歩的な英語を聞いて、話し手の意向の大体を理解できるようにする。
B 話すこと	(2) 英語を言うことに慣れ親しみ、身近なもの・ことを英語で言ってみようとする態度を養う。	(2) 簡単な英語を用いて、自分の好みなどを話すことができるようにする。	(2) 初歩的な英語を用いて、自分の思いや考え、事実などを話すことができるようにする。
C 読むこと	(3) アルファベットへの興味・関心を高めることができるようにする。	(3) アルファベットを読むことができるようにするとともに、身近なことを表す英語を理解し、声に出して読むことができるようにする。	(3) 簡単な英語を理解し、声に出して読むことができるようにする。
D 書くこと	(4) アルファベットへの興味・関心を高めることができるようにする。	(4) アルファベットを正しく書き、身近なことを表す英語を見ながら書くことができるようにする。	(4) 簡単な英語を見ながら書くことができるようにする。

※ 各学年の年間指導計画（単元名、単元の目標、主な活動、評価規準等については別添資料参照。

## 2 教育課程の内容は適切であったか

小学校に新教科「小学校英語科」を新設し、小学校1年生から英語を導入することは適切であり、効果を上げてきているところである。

英語は繰り返し聞いたり話したりすることが大切であり、特に低学年時には物とイメージと英語の音を一致させることが大切であると言われる。日常生活で使用される頻度の高い数字や色、挨拶などの基本的語彙や表現は、低学年から英語を導入することにより、毎回の授業の中で繰り返され、言語の使用場面やイメージとともに、自然と定着していく。

現在、作成を進めている小学校英語科のカリキュラムは、低学年から英語に少しずつ触れていき、覚えた英語を繰り返し活用しながら学習を積み重ね、相手と積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成はもちろん、「聞くこと」「話すこと」「読むこと」「書くこと」などのコミュニケーション能力の基礎を育むことを目指すものである。子どもの発達段階や知的好奇心の高まりに合わせて学習を進めていくことで目標を達成することができるよう、低・中・高学年それぞれの目標を定め、指導内容を設定している。

### （１）低学年のカリキュラム

低学年では、歌やゲームに重点を置いた活動を通して、英語のリズムに慣れたり、主に身近なもの・ことを表す語彙や表現の技能を身に付けたりすることを目指す。身近なもの・ことを表す英語を多数聞いた話したりしながら意欲的に学ぶことができるような話題を単元として位置付け、生活経験や他教科における学習内容と関連を図った活動を様々な設定している。

#### ＜① 算数科との関連を図った例＞

例えば函館小学校では、１年生の単元「いくつあるかな？」において、１年生でも身近な英語表現になっている１～１０までの数字を表す英語を扱った。また１０より大きい数字を表す英語にも興味を抱いている子どもも多いため、今後の学習で活用できるようにすることも踏まえ、１１と１２についても取り上げた。この学習を行う時期は、算数科では足し算や引き算が導入される頃であり、子どもの興味・関心に合わせて、ものの数を単純に英語で数えるだけでなく、あわせていくつあるか数えるなどのゲーム性のある活動を設定するなど、算数科の学習内容との関連を図るようにした。

#### ＜② 生活経験や生活科と関連を図った例＞

また同じく函館小学校で実践した２年生単元「好きなおやつをもらおう」においては、絵本『yummy YUCKY』の読み聞かせによる導入を行い、絵本に出てきた食べ物や普段食べているものの中から yummyなおやつを想起するよう促した。そして yummyなおやつを集めるために、英語を使いながら交流する場を設けた。英語を使って会話することを楽しんだり、欲しいものを手に入れることができたという達成感を味わうことができるよう、お店屋さんごっこを行ったり、お店でもらったおやつカードに色を塗って自分好みのおやつプレートを作るなど、生活科での学習経験を生かした活動を設定したり、図画工作科との関連を図った学習を展開する場を設けたりした。

#### ＜③ 生活科と関連を図った例＞

生活科と関連を図った別の例として釧路小学校での実践がある。釧路小学校では、１年生の単元「むしとりをしよう」において、１年生の子どもたちが興味・関心を強く示すものとして、虫を表す英語を取り上げた。１年生は、入学してから、初めて見るものや、新しく知ることによって溢れている。子どもたちが休み時間遊んでいる校庭のそばにある森にいる虫や、生活科で捕まえた虫を取り上げることで、子どもたちにとって身近なものを表す英語に触れることができるようにした。

#### ＜④ 生活経験と関連を図りながらゲーム性のある活動を設定した例＞

札幌小学校でも、低学年の目標を達成することができるよう、数、色、体の部位、動物、身近な乗り物など、子どもの興味・関心や日常の中に登場しうる単語を多く取り入れて授業をつくっている。例えば１年生の単元「このやさい わかるかな？」においては、野菜の断面を見たり色などを表す英語をヒントとして聞いたりしながら何の野菜か推測するようなやり取りを楽しむことができるよう、簡単なクイズ形式の活動を設定した。楽しく活動できるように設定したゲーム性のある活動は、低学年の子どもたちが集中を持続し、興味・関心を持ち続けながら取り組むために必要な要素であると考えられる。

この実践では、単元で扱う単語の精選を図った。野菜を表す語彙は、身近ではあるものの、ものによっては子どもにとってなじみの薄いものもあるため、数多く導入することは過重負担となる可能性があった。

そこで、外来語として使われている語や、英語ならではの言い方をする語をバランスよく取り入れていき、子どもにとって適度な難易度になるようにした。語彙数についても、子どもの実態を見ながら加減していった。その際、単元で扱う語を2時間に分けて取り入れていった。こうした手立てによって、子どもが適度に難しさを感じながらも、単元の学習を通して全ての単語を理解し、発話につなげることができた。

### ＜⑤ 低学年カリキュラムのまとめ＞

このように低学年では、数、色、体の部位、動物、虫、身近な乗り物、おやつなどの話題を設定し、それらを表したり、それらを使ってやり取りを楽しんだりするための単語を、一単元につき8～10語程度扱い、定着を図っていく。子ども一人一人の生活経験や学習経験を基に学習を展開することができるような話題を単元として設定することで、身近なもの・ことを表す英語を多数聞いたり話したりしながら英語の音声に少しずつ触れていくことができるようにしている。それとともに、「これを英語で言うことができる」という自信を高め、「これはどう言うのだろう」といったような「もっと学びたい」気持ちを引き出すことをねらったカリキュラムとすることが有効である。

## （2）中学年のカリキュラム

中学年では、友達や教師とのかかわりを重視したコミュニケーション活動に取り組み、低学年で触れてきた身近なものを表す英語も含めて、簡単な英語を使いながら、自分の好みや思いなどを聞いたり話したりすることができるようになることを目指している。また、アルファベットを識別したり、正しく書き写したりしながら、身近なことを表す英語を読んだり書いたりすることができるようにしていく。

### ＜① 簡単な英語でやり取りする例＞

例えば身近なものを表す英語を活用していく単元“*What's this?*”においては、実際に触ったり、簡単な英語やジェスチャーなどのヒントから類推するクイズ大会を設定した。その際、前学年までに聞いたり言ったりしたことのある英語については、極力思い出しながら使ったり、思い出せない場合は、友達や教師に教えてもらって使いながら覚えていくことを働きかけた。またヒントを求めるための簡単な英語として“*Hints, please.*”や回答に対する反応として“*That's right.*”や“*Sorry, no.*”などを教え、それらを使いながら積極的にコミュニケーションを図ろうとしている様子が見られた。前学年までに触れてきた英語を使うことができる安心感が、新しい英語を覚えたり相手の様子に合わせて反応するための英語を選び出したりすることへの抵抗感を和らげることができた。

### ＜② 自分の好みなどを伝える場面の設定例＞

前述の学習経験を生かし、色や形など表す英語を扱う単元“*Which one is my T-shirt?*”においては、Tシャツの特徴をヒントとして伝えることで、自分のTシャツはどれか当てさせる活動を展開した。子どもにとって自分の好みは比較的発話しやすいものである。そこでTシャツには自分の好きなデザインや食べ物、動物などを描くようにした。これにより、Tシャツの特徴を、“*red and white*”など身近なことを表す英語で伝えるだけでなく、“*I like cats.*”など自分の好みを英語で伝えることができるようにした。

またアルファベットを扱う学習場面では、自分の大好きなものの絵を描き、それを表す英語を書き写したピクトフォリオの制作に取り組んだ。この学習を始める少し前に、国語科においてローマ字の学習に取り組んでおり、それに合わせて学習活動を設定した。英語だけでなく日本語もアルファベットで表すことができることに気付いていた子どもたちは、アルファベットを使って表してみたいという思いや願いを一層強めているところであったので、たいへん意欲的に活動に取り組んでいた。

## （3）高学年のカリキュラム

高学年においては、初歩的な英語を聞いて話し手の意向の大体を理解できるようにしたり、初歩的な英語を用いて自分の思いや考え、事実などを話したりすることができるようになることを目指している。また、



これまでに学習してきた身近なことを表す英語や簡単な英語を声に出して読んだり、書き写したりしながら、文字を介してコミュニケーションを図ることができるようにする。

様々な学習経験を積み重ねてきている高学年は、簡単な英語を使うゲーム性の強い活動だけでは飽き足らず、自分たちにとって興味・関心のある情報を求めたり、自分たちの知っていることを英語で紹介したりすることに挑戦したいという思いや願いを強めるようになる。そこで、高学年では事実情報について伝え合う活動を展開する単元を多く設定し、事実情報に関してやり取りをしつつ、自分の思いや考えなども伝え合うことができるようにしている。

例えば函館小学校の5年生では、宝物が隠されている場所のヒントが英語で書かれたカードを読みながら行う宝探しを行った。これは4年生で設定している単元「どこにありますか？」が元になっており、“Where is the treasure?”－“It’s on Hikaru’s desk.”などの英語を聞いたり話したりしながら活動を展開するが、5年生ではこれに色や形を表す英語を読むことも取り入れ、さらにいくつか集めた情報を整理することで初めて宝物の場所がわかるようにした。前学年までに覚えてきた英語を使って事実情報を聞いたり話したりすることに加え、書かれてある英語の内容を基に推測するやや高度な活動であったが、学習してきた英語を活用できることや、レベルアップした内容に挑戦できたことに満足感を覚える子どもが多くいた。

同じく5年生単元で、「自分の町を紹介しながら附属小の友達と交流しよう」がある。これも、子どもたちが今住んでいる町の観光名所や名物など自慢できる事実情報を紹介する活動を行う単元である。子どもたちは自分たちの町について知っていることをウェビング・マップに書き出しながら、伝える内容を決め、伝えるための既習の英語を想起したり、新たに覚えたりしながら意欲的に学習に取り組んでいる。

なお、旭川小学校の高学年のみ、検証のために英語の時間を年間70時間ずつ設定している。他の附属学校より多く設定している35時間分を利用し、5年生では様々な人とのかかわりを重視したコミュニケーション活動に取り組み、表現の技能を身に付けることを目指している。6年生では旭川小学校独自のカリキュラムを作成しており、5年生までに学習してきた基礎の上に、定着を図るための時間を取り、タスクで使用しながら技能を習得していく活動を設定した。また、実際のコミュニケーション場面で言葉を使用できるようにするために、語彙や表現を増やすことにしている。

#### (4) 中学校におけるスパイラルタイム

中学校では現行の教育課程の枠内ではあるが、英語の授業の一部を「スパイラルタイム」と設定し、小学校英語科と指導方法や学習内容の一貫性や共通性を目指したカリキュラムを作成中である。この「スパイラルタイム」は、教科書を離れ、通常の授業以上に content-based を意識して、英語をツールとして使用しながら、自分の思いや相手の考えを受け入れながら活動する時間である。この時、小学校で学んだ内容を想起させ、スパイラルに学び直すことにより、生徒の英語力が向上することがわかってきている。また、教師間交流や児童生徒間交流を中心とした効果的な連携を図る時間としても設定でき、生徒の英語学習へのモチベーションや目的意識を高めることにも有効である。

具体的には、以下の①～④の内容を考えている。

- ① 小学校英語科のカリキュラムに基づき、学習内容の継続性を考慮した中学校における橋渡しの時間にできるよう、中学校1年生の最初の5～6時間を使ったオリエンテーションとしての活動
- ② 日常生活における意味のあるやりとりを中心としたコミュニケーション活動やコミュニケーション・ストラテジーの育成を狙った帯的活動
- ③ 中学校終了段階で、討論やディベートなどの高等学校の学習内容を含めたコミュニケーションの機会をもたせるための発展的な内容の活動
- ④ 英語での自己紹介活動を小学生と交流したり、小学生へのビデオレターを作成したり、他地域の中学生や異文化をもつ人々と音声を中心として交流したりする等の活動

小学校との接続だけでなく、高等学校との接続も円滑にすることが大切である。高等学校の英語教育につなげるための文法指導、リーディング指導、ライティング指導、スピーチ・プレゼンテーション指導など、より高度なコミュニケーション能力を目指すための段階的指導についても、学校の英語教育の現状を調査把握しつつ、スパイラルタイムの中でどのようなことができるかを検証していく。

### <① オリエンテーションとしての活用の例>

旭川中学校では、中学校入門期に、スパイラルタイムを授業の前半に帯時間として設定し、“Hi, friends!”で扱われている言語材料等を用いて活動を行わせ、その後、本時の文構造の定着につなげている。これにより小学校で慣れ親しんだ表現を想起させることができること、中学校の習得の順序にこだわらないため、豊かな言語活動ができる。文構造に応じた場面や機能に着目させながら活動することができるからである。

また、入門期には公立の学校から進学してくる生徒もいるため、その差を早めに埋める必要がある。そのため、小学校卒業時のCAN-DOリストを作成し、これを基に入学してきた生徒がどのくらいの英語運用能力があるのかを判断し、学習計画に反映させることが有効であることがわかっている。

### <② 帯時間としての活用の例>

函館中学校では、1年生において、日常の授業の中で“ENJOY ENGLISH”という帯時間を設定し、4月から継続的に、コミュニケーション能力を高める対話活動を繰り返し取り入れて実践している。生徒たちはペアや3人組のグループに分かれ、モデルに倣って対話のやりとりを練習後、クラス全体の前で発表しながら、日常生活に即したコミュニケーションを積極的に図ってきた。

また、モデルの対話表現にはつなぎ言葉や会話を膨らませるひと言を加えるなどコンテンツの工夫を図りながら、指導の積み重ねを図ってきた。これにより、コミュニケーションへの抵抗感を和らげることと同時に、会話を継続する力を育成し、さらにレスポンス・スピードを上げることもねらいとしている。

札幌中学校では、3年生において、授業の初めに“CS (Communication Strategy) Training”というパラフレーズする力を伸ばすウォームアップ活動を行っている。この活動は、小学校の共通カリキュラムにも組み込まれている方略的能力の育成を中学校で引き継ぎ発展させようとするものである。例えば、“cellphone”を、“It’s a small phone we can carry around.”と説明させるような活動である。この活動の目的は、自分の知っている表現のみを使って、相手に英語で即時的に説明するという点にある。英語が苦手な日本人の姿として挙げられる例に、自分の言いたい単語を知らない場合、会話が止まってしまう場合がある。言いたい単語が出てこない場合というのは、母国語による会話の場合にも起こりうる。その時、私たちは様々な方法で会話を続けることを試みる。その中でも、簡単な言葉に言いかえるパラフレーズ(paraphrase)や近似表現(approximation)を使うことが多い。英語によるコミュニケーションにおいても、このストラテジーが求められる。

### <③ 発展的な活動の例>

釧路中学校では、1年生において、ストーリーリテリングの授業実践を行った。この時、教材には、“Hi, friends! 2”で扱われている「桃太郎」を選択し、登場人物について説明する活動を行った。教材や学習内容を小学校と共通化することで、生徒は小学校の学習内容を想起しながらスパイラルに学習に取り組むことができ、英語学習へのモチベーションを高めることができると考えた。さらに、ストーリーリテリングという小学校時代にはなかった学習を取り入れることで、生徒が既習事項の定着に向けて、目的意識を明確にもちながら学習活動に参加できるようにするとともに、表現した内容に自分の学びの深まりを実感できるよう工夫した。また、物語の人物(内容)について自分の考えや感想を述べる場面を設定することで、自分の考えや思いを表現するとともに、他の仲間の考えや思いを受け入れたりしながら、相互のつながり

を意識できるようになった。

旭川中学校では、3年生において、1・2学年で身のまわりの出来事や地球環境の問題について読んだり、それについて簡単な意見を英語で発信したりしてきたことを踏まえ、教科書以外から題材を選び、読ませた後に自分の意見を書かせた。この時、話の内容や書き手の意見などに対して感想を述べたり賛否やその理由を示したりなどすることができるよう、また書かれた内容や考え方などを捉えられるよう、英文そのものや教材の提示のしかたを考えるなどして、読み手として主体的に考えたり判断したりしながら理解していけるように指導過程を工夫した。その結果、地雷問題等について自分に何ができるかを考え、どのような活動が行われているかを調べたり将来の夢などと絡めたりしながら自分の意見をまとまりのある文章で話したり書いたりすることができた。

札幌中学校では、2年生において、英語の運用能力を育成することをねらい、教科書の読み物教材から発展させた内容に関するライティングの授業実践を行った。まとまりのある内容の英文を読んで理解するだけではなく、その内容について考えたことや表現したいことが生まれるような授業を展開することで、生徒が学んだ表現を使う機会を得たり、扱った内容をより深く理解したりすることができると思った。

英語の運用能力を育成するためには、ただ「英語を学ぶ」のではなく、「英語を使って何ができ、活動を通して何を学ぶのか」といった CLIL 的活動の視点が重要になる。札幌中学校 3年生の実践では、教科書のリーディング教材の読後の活動として、英語を身に付けたいと思っている物語の登場人物に対して、効果的な英語の学習方法についての自分の考えを手紙で伝える、という学習課題を設定した。これにより、自分の考えを述べる“I think”や、相手に勧めたり促したりする“you should”, “you have to”などの表現、または、より説得力のある表現にするために“because”などを用いて理由や論拠を示すような表現が自然に使用されることをねらった。また、英語の学習方法について学ぶ、という自分自身の現実の問題として捉えることができる点や、そのことが実際に今後の自分の英語学習にも活かすことができる点に価値があったと言える。

#### <④ 他校種との交流活動としての活用の例>

函館中学校では、小学校と中学校の円滑な接続を目指すため、中学校 1年生と小学校 6年生による合同授業を行った。小中合同授業を実施する理由として、①児童生徒の英語学習への意欲が高まり、言語習得の動機づけが明確になり、②児童生徒の積極的なコミュニケーション活動を行うことで、互いを尊重する態度が涵養されると予想されるからである。

小学校では“Hi, friends! 2”の「Lesson 6 “What time do you get up?～一日の生活を紹介します～”」を活用し、進学後の自分の生活にかかわる問題を学習の動機と設定して、中学生の生活について実際に中学校を訪問してインタビューを行った。中学校では New Horizon English Course 1（東京書籍）「Unit 7 サンフランシスコの学校」ならびに「Multi Plus 2 一日の生活」を活用し、合同授業における小学生とのやりとりを通じて、What time...?の文と応答を実際に使用したり、自分の一日の生活について先輩としての立場で後輩に紹介したりする場面をまとめとして設定した。

本時では、小学生が準備した質問に対し、中学生がその場で即時的に応答することが求められており、また同時に単調になりがちな Q&A にさらにひと言付け加えたり質問を返してみたりというコミュニケーションの工夫も必要となる。このことは中学校 1年生の CAN-DO リスト「話すこと・発表」の「身近な人や身のまわりのものについて、簡単な英語で話すことができる」と「話すこと・やりとり」にある「ある話題について、自分の言いたいことを簡単な英語で話したり、質問したりすることができる」に相当する。

合同授業のねらいでもある言語習得の動機づけとして、英語学習について生徒たちの学習意欲を高めるためには、日常の授業で身につけたことを実際に使用する時間と場を提供し、生徒自身がその成果と課題を振り返ること（実感や自己評価）が有効であることが実証されたと考える。

旭川中学校では、コミュニケーションの必要性を高め、より実際の言語の使用場面に近づけるため、本学旭川校の英語科3年の学生と交流を行った。1年生の「自己紹介しよう！」という単元において、be動詞や一般動詞などの既習の文構造を使用して自己紹介したり、出身地、趣味や特技、飼っているペットなどについてたずねたりするなど、英語で実際にやり取りをさせた。

この活動を導入するために、授業では、まず、“What do you want to introduce about yourself?”と発問し、考えを明確にするために、5人の自己紹介例を聞かせ、具体的なイメージをもたせた。生徒が慣れ親しんできた表現を再利用することにより、どの生徒も内容を理解することが容易となった。

展開では「自己紹介をし、やり取りを通して相手のことを知ろう。」という課題を提示し、目指す姿を「自己紹介を4文以上で行い、質問をしながら40秒間会話を継続することができる。」とした。「40秒」という時間は、準備していた自己紹介をするのに、使用できる文や話すスピードなどを考えて約15～20秒、またそれを聞いて即時的に考えながら質問をしたり答えたりする時間を生徒全員に保障するのに、もう20秒程度必要であろうということから設定した。

その後、現実的なコミュニケーション活動を行わせるために、ICT機器(iPad用のアプリFaceTime)を使って、本学学生と交流を行った。実際のやり取りでは、グループでの学び合いや助け合いをしながら、その都度違う学生と1人5回ずつやり取りを行い、ほぼ全員が自信をもって課題に取り組んでいた。

交流後の自己評価・相互評価等から判断して、活動内容は生徒全員が十分満足できるものであった。生徒1人1人がクラスメイトの刺激を受けながら、これまで身に付けた資質能力をさらに高めたり、何が言えるのか、あるいは言えなかったのかの理解を深めたりする機会となり、英語を学ぶ意義の認識を高めることができたと考える。また、生徒の実際のやり取りを見ると、中学校では未習であった“I want to be ～.”などを使って自己紹介をしている生徒も多くおり、小学校からの学びの連続性を確認できた。

教科書を離れ、通常の授業以上にcontent-basedを意識して、英語をツールとして使用しながら、自分の思いや相手の考えを受け入れながら活動する時間であるスパイラルタイムを設定することにより、上記のような活動を大胆に取り入れることができ、即時性のあるやり取りを意識したコミュニケーション能力をより一層高めることができ、スパイラルタイムは有効であると考えている。

### 3 授業時間等についての工夫

授業時数については、今後さらに検討が必要である。

### 4 指導方法の適切性

#### (1) 小学校における指導方法の適切性

各小学校で新カリキュラムの実践を行うための指導方法や教材等については、代表的な実践例を取り上げていくと、次のように整理することができた。

- |   |
|---|
| <ol style="list-style-type: none"><li>① 学習への一層の動機づけを図る活動の設定</li><li>② ゲーム性のある各種活動の設定</li><li>③ コミュニケーションを支える技能を身に付けるための指導</li><li>④ 学習への一層の動機づけを図る教材の用意</li></ol> |
|---|

#### <① 学習への一層の動機づけを図る活動構成>

子どもが自主的、主体的に、そして意欲的に学習活動を展開することができるようにするためには、学習への動機づけが欠かせない。特に、小学校英語科は母語ではない言語として英語をたくさん使う教科であることから、学習への一層の動機づけを図ることができるような活動を設定するよう工夫している。

## ア 授業の導入

例えば旭川小学校における授業の導入の場面である。指導者との挨拶や前時の学習の復習に取り組むことに加え、日常の生活や週末の出来事を尋ねるなど、意味中心のやり取り（例：What did you do last weekend?）をしている。授業の導入から、意味のあるコミュニケーションが図られる活動は、中学校への円滑な接続を図る上でも大切な指導であると考えられる。

## イ 目的意識をもった活動の設定

目的意識をもった活動を設定することも、子どもが意欲的に学習活動を展開していくことができるようにするための重要な手立ての一つである。

釧路小学校の実践では、1年生が休み時間遊んでいる校庭のそばにある森（通称「ふしょうのもり」）にいる虫や、生活科で捕まえた虫を取り上げ、子どもたち自慢の遊び場である「ふしょうのもり」に、「どんな虫がいるの?」と問うことにより、ALT に伝えたいという思いを膨らませることができるようにした。自分にとって身近にあるもの、興味・関心のあるものを取り上げることで、また、ALT に伝えるという目的意識が生まれたことで意欲的になった。

## ウ 学んだ言葉を使った交流とその成果を実感できるようにするための場の設定

目的意識をもって活動できるようにすると、子どもは意欲的になる。そして実際に友達と学んだ言葉を使ってコミュニケーションを体験し、その成果を実感できることで、一層学びへの意欲を強めていく。

例えば札幌小の実践では、子どもたちが学んだ野菜を表す英語を使い、野菜の好き嫌いを尋ね合う活動を設定した。食べ物の好き嫌いは、個人によって差が大きく出るため、いろいろな答えを引き出しやすく、多くの友達と積極的に関わろうとする姿が期待できる。「Green pepper?」のように上がり調子の抑揚をつけて発音することで尋ねる意味合いをもたせ、英語の音を楽しみながら、繰り返し声に出すことができるようにした。

友達に尋ねることができた成果はワークシートに表し交流させた。自分の活動を形に残すことによって、関わり方の傾向が見えるとともに、より多くの活動の様子を残そうとする意欲を高めることができた。これにより、「自分と同じものを食べられる人を探した」「全部の種類の野菜を調べた」など、子ども自身が考えをもって自分なりの解決課題を設定し、友達と関わろうとすることができた。また、記入の仕方を工夫して自分の活動の成果を残そうとする姿も見られた。

## エ 学習の流れの提示と英語を活用する場の設定

子どもの実態や単元の内容によっては、単元の導入時に例えばデモンストレーションビデオを観せることにより、目的意識や相手意識をもたせ、やってみたいという意欲を高めるとともに、何をどう学習していけばよいか提示することが効果的な場合もある。

釧路小学校の5年生で実践した単元「What's my favorite thing? ～お気に入りのものを紹介し合おう～」では、第1時に、文字クイズを取り入れながら、お気に入りのものと、その理由を紹介し合っているビデオを観たことで、子どもは学習の流れを見通し、目的意識や相手意識をもつことができた。そして今まで学習した表現をどう活用するか考え、コミュニケーション活動に工夫しながら取り組む姿が見られた。

また学習した英語を活用できるようにする場の設定の類例として、旭川小学校の実践では、練習した表現を使えるようにするために、現実に近い場面設定をして、ペアやグループによるロールプレイやインタビュー等のタスクに取り組んでいる。

## オ インフォメーション・ギャップを利用する活動の設定

中学年から高学年にかけては、同じような活動を繰り返すことのないよう、それまでの学習経験を生かしつつ、学習への一層の動機づけを図るために、インフォメーション・ギャップのある状況を設定し、それを解決する活動を取り入れた。それまでに覚えてきた英語を活用しながら、互いに必要な情報を伝え合うことで、課題を解決することができるようにした。

例えば5年生で行った単元「Where is the treasure?」では、活動に付加する強いゲーム性としてインフォメーション・ギャップのある状況を設定した。男子は女子が探している宝物の場所が英語で書かれているカードをもっており、その内容を女子に口頭で伝えるようにした。逆に女子は男子が探している宝物に関する情報をもっているようにした。子どもたちは男女とも互いに探している宝物を見つけ出すために、英語で積極的に情報交換を行っていた。

一方、現実のインフォメーション・ギャップを埋め合う活動も試みた。6年生の単元「中学生の一日の生活についてインタビューしよう」では、中学生との合同学習を行う場を設定し、小学生の自分たちが知りたいと思っている中学生の生活について中学生に直接インタビューすることで、実際のインフォメーション・ギャップを埋め合うことができるようにした。中学校への進学を控えている6年生が活動を行ったからこそ、中学生との積極的な交流になったと捉えている。

このように、高学年においては、学習経験や発達段階に応じた知的好奇心を満足させることができるよう、インフォメーション・ギャップの埋め合いの場を意識的に設定するようにした。

## <② ゲーム性のある各種活動の設定>

### ア ゲーム性のある活動の設定とそのねらい

英語そのものへの興味・関心を喚起し、英語に慣れたり、コミュニケーションを図る楽しさを味わったりすることができるよう、低学年から中学年にかけての学習活動としてシンプルなゲームを各種設定することが多くある。ビンゴゲームや神経衰弱の類の活動は英語の音声に慣れる際のシンプルなゲームの代表例だが、これらは子どもたちの日頃の遊びの経験に支えられているので、学習のねらいに合わせて取り入れることで子どもたちが意欲的に活動を展開しながら学んでいくことができるものと言える。

これらの他に、例えば函館小学校の実践では、ものの数を数えたり計算をした結果を伝えたりする場合や、何の野菜・果物のことかヒントをもとに類推する場合など、事実情報のやり取りを行う場合にはクイズ形式の活動を主に取り入れている。クイズの答えを探るために、事実に関して積極的に尋ねたり答えたりするからである。クイズは多くの子どもにとってワクワクするものであり、学習内容に合わせて取り入れることで自然と積極的なやり取りが生まれる。

同じく函館小学校の実践では、自分の好みや欲しいものを伝え合う場合には、ミニ絵カードを用いたショップ型の活動（いわゆるお店屋さんごっこ）を取り入れている。ショップ型の活動にすることで、好みや要求を伝え合うことが容易な環境になる。また好きなものや欲しいものを表現する場合には、好きなもののミニ絵カードをショップで手に入れ、それを切ったり貼ったりしてオリジナルの絵カードを作り、できあがった絵カードを見せながら、英語で好きなものを話す活動も取り入れている。ショップ型の活動も日頃の生活経験や他教科での学習経験が生きるものなので、効果的に取り入れることで子どもたちの活動も意欲的になりやすい。

このようにゲーム性が付加された活動やごっこ遊びの要素を取り入れることで、おもしろそう・やってみたいという思いをもって活動に取り組む中で、英語そのものへの興味・関心を喚起し、英語に慣れたり、コミュニケーションを図る楽しさを味わったりすることができるようにした。

### イ 英語の音声と対象のイメージとのリンク

またゲームやクイズは、英語を聞いてイメージ化することができるようにするための手立てにもなっている。例えば札幌小学校では1年生の単元「このやさい わかるかな?」において、野菜の断面図を提示しながら何の野菜かを当てていくクイズを取り入れたが、このクイズでは絵を見ながら日本語で野菜を当て、その後英語での言い方を確かめていった。そして、クイズに登場した野菜を絵カードで再確認し、ゲームの中で繰り返し使用していった。

釧路小学校においても、英語の音声と対象のイメージとがリンクされるよう、より自然な発音の音声を

たくさん聞かせたり、自然と発話させたりするために、ゲーム性を付加した活動を設定し、実践している。

### ＜③ コミュニケーションを支える技能を身に付けるための指導＞

#### ア 英語の音声と対象のイメージとのリンク

相手とコミュニケーションを図るためには、使われる英語とその意味内容を理解したり、理解した上で表現したりすることができなければならない。したがって、コミュニケーションを支える技能として、英語を聞いたり見たりして対象をイメージできる必要がある。低学年から中学年にかけては、先に述べたようなゲーム性のある活動を通して、子どもたちは少しずつ英語の音声と対象のイメージをリンクさせていくと考えている。

#### イ 英語の音声と文字とのリンク

高学年になるにつれて、英語を読んだり書いたりしてみたいという思いや願いも強くなっていく。しかし日本語と大きく異なる英語の性質上、読んだり書いたりすることは、音声を聞いたり真似して言ったりすること以上に難しい。そういった難しさの一方で、文字を介したコミュニケーションは実際に行われており、それを支える技能も少しずつ身に付けていくことができるようにする必要がある。

例えば旭川小学校では、フォニックスの取組を行っている。これは子どもが未知の単語に出会っても、フォニックスを活用して「読んでみよう」という意欲を育むためである。文章が読めるようになると、一層主体的に学習を進めるようになり、英語の力が大きく伸びると考えている。

また、子ども一人一人の英語力の差に配慮するために、iPadを活用した個別学習に取り組む実践も行っている。子どものレベルに合わせて、単語や表現の練習ができるようにシステムを構築している。また、アクティブボードや電子黒板も積極的に活用している。どのような学習形態においても、ICTの活用は有効である。

#### ウ 文字への意識づけを図る課題・環境設定

釧路小学校の5年生で実践した単元「What's my favorite thing? ～お気に入りのものを紹介し合おう～」では、今までに学習した表現を活用することができるよう、文字入りの絵カードを用意した。お気に入りのものを選ぶ時に扱った絵カードは、108枚(108種類)作成し、すべて、「Hi, friends!」で出てきたものにした。再提示することで、新しい表現とともに活用する場面が生まれると考えた。一度音声から入った単語を、あらためて絵と文字とを一緒に提示することにより、今まで学習したことを想起したり、文字を読んだり、書き写したりすることができた。

この時期の子どもは、聞くこと、話すことに興味をもちながら、文字を読んだり書いたりすることにも興味をもち始めている。耳から入った音声を文字にしてみたいと思ったり、目に入る文字や単語を読みたいと感じたりしているのである。今までも新しい表現には、イラストとともに文字を入れてきたが、今回は一度聞いたことのある単語に関する絵と文字と一緒に提示した。さらに、文字の背景には4線を入れ、書き写したいと思った時の手助けになるようにした。

このような手立てにより、子どもたちは活動の中で、文字の位置、大きさにも注意しながら書き写すことができるようになっていった。またその中から、お気に入りのものを選んだり、相手のお気に入りのものを当てたりする際に、文字をヒントに紹介し合う活動（「What's the first letter?」「How many letters?」などの英語でやり取りを行う）を取り入れることにより、文字や単語への意識づけが高まっていった。子どもは、自然に何度もそのアルファベットや単語を読むことにより、アルファベットが数個集まったものが単語で、意味を表すことになると自然と気付いていた。

#### エ 学習の積み重ねや言葉への気付きを促す環境の設営

子どもが学習する単語や表現は、どんどん積み重なっていく。学習した言葉を活用したり振り返ったりしながら、コミュニケーションを図るための方略やマナーに関する気付きや、単語の種類や役割などへの

気付きを促す手立てとしての環境設営も大切にしている。

例えば釧路小学校では、コミュニケーションのマナーやつなぎ言葉を「コミュニケーションの木」として掲示し、日常的に子どもが目にすることができるようにしている。また、学習した単語や表現は絵カードにし、その単語の種類によって色分けし、かつ動かすことのできるボードを作っている。

学習教材が子どもの目に入る場所にあることで、何気なく目にしたり、大切なことを再確認したりするきっかけとなり、それを視覚的に授業の中で取り上げることにより、カード並びから語順について気が付いたり、色の違いから疑問詞に注目したり、品詞の順番や語の入れ替えに着目する姿が期待される。

#### <④ 学習への一層の動機づけを図る教材>

学習への動機づけを図るためには、これまでに述べたような活動の設定、直接的な指導、環境構成などの他に、魅力ある教材等も必要である。

##### ア 話題の提示と自分の好みの想起を促す各種絵本

主に低学年から中学年において、子どもたちの新しい学習内容への興味・関心を喚起したり、英語の音声に慣れることができるようにするための手立てとして、魅力ある英語の絵本の読み聞かせを行ったり、英語の歌を取り入れたりしている。

例えば函館小学校では、2年生で設定している単元「ハロウィーンのお面をつくろう」で絵本『Boo Who?』の読み聞かせを行った。この絵本には、ハロウィーンでおなじみのキャラクターが順番に登場するので、読み聞かせをしながら見せていくことで、子どもたちは自然とそれらのキャラクターを英語で言っていく。子どものハロウィーンへの興味を喚起することのできる教材の代表例であるといえる。

その他、前述の通り、函館小学校の実践で取り入れた『yummy YUCKY』や、札幌小学校の実践で取り入れた『やさいのおなか』などがある。

以上のように、新カリキュラムの実践では、子どもの学習への動機づけを図りつつ、コミュニケーション能力の基礎を養っていくための指導方法や教材等の充実に努めている。

## (2) 中学校における指導方法の適切性

中学校においては、英語をツールとして使用しながら、自分の思いや相手の考えを受け入れながら活動する時間であるスパイラルタイムにおける指導方法として、以下のようなものが適切であることがわかってきている。

### <① CS (Communication Strategy) Training>

札幌中学校では、3年生において、授業の初めに“CS (Communication Strategy) Training”というパラフレーズ力を伸ばすウォームアップ活動を行っている。この活動は、小学校の共通カリキュラムにも組み込まれている方略的能力の育成を中学校で引き継ぎ発展させようとするものである。自分が伝えたい語彙が想起できないときや相手が理解できないときに、それに代わる語彙を使って表現する能力を高めることで、コミュニケーション能力の向上と語彙の定着を図られることがわかってきている。

### <② PWIM>

釧路中学校の実践で取り入れたPWIM (The Picture Word Inductive Model, E. Calhoun 1999) という指導方法は、学習者が1枚の写真や絵から思いつく単語を書き出し、その単語を使用して、文や物語を作成していく手法である。釧路中学校では、グループで語彙や表現を出し合った後、それらの語彙を用いて個人で物語をリプロダクトしていくという活動を行った。聞いたり読んだりして得た情報だけではなく、視覚的な情報からも既習事項の語彙や表現を想起させることができた。Reading と Writing のつながりを強めたり、コミュニケーションスキルを高めたりするために有効な指導方法である。



### <③ Creative Situation Skit>

基本的な skit を与え、その skit がどんな場面で使われるか、状況や人物、心の動き等を含めてグループで考えながら skit を完成させ、グループで演じさせる。

(提示する文) A: What's this? B: It's a ～.

(教師の発問) この表現が使われるのはどんな場面か考えて、skit を作成しよう。

コミュニケーションにおいては、言語はある具体的な使用場面や働きを意識することが必要であり、そのことを子どもたちに理解させるために有効な指導方法である。

### <④ Dictogloss>

自然な口調で話されるまとまりのある英語を聞いて、概要や要点を聴き取り、そのメモをもとに仲間と協力して英文を再生していく活動である。小学校英語科とのつながりを意識し、「意味内容そのものに対する問い」を生むと同時に、中学生らしい英語表現の高まりを意識し、文法規則など「言語そのものに対する問い」も生むことができる。意味のある、かつ、取得したいと思う情報を与えられたときに、学習者は、仲間と協力して語彙や文構造に着目し、理解を深めると同時に、モニタリング能力の向上が図られた。

## (3) ICT 機器等の活用について

### <① わくわくスノーマン・プロジェクト>

学習への動機づけが図られることで、子どもはより自主的・主体的に学習を展開し、積極的に英語でコミュニケーションを図ろうとする。低学年から中学年にかけては、触れたことのある英語を活用しながら、同じ学級・学年の仲間とコミュニケーションを図ることに楽しさを感じる子どもが多い。しかし学年が上がり学習が進むと、コミュニケーションを図る対象として、同じ学級・学年だけでなく、違う学年や、学習内容によっては学校の仲間以外の人にも関心を向ける。

そこで、自分の学校にしながらこれを可能とするための手立てとして、北海道教育大学と附属小中学校では、学習成果を蓄積型発展教材としてデータベース化する「わくわく！スノーマン・プロジェクト」を用意した。これは子どもの文字への関心を引き出すとともに、「読むこと」「書くこと」に取り組む意欲をもたせ、他者との協同学習による学びの広がりを実感させ、英語学習への動機づけと異文化理解を促す契機となるようにしたものである。このために専用サーバーを設置し、そこへデータをアップロードできるようにしている。8 附属小・中学校の子どもたちがそれぞれに作成したカードは、雪だるまのようにどんどん大きくなっていき、いつでも、誰でも、どこからでもアクセスできるデータベースとなっていく。子どもの自発的な調べ学習や提示用の教材として使用することができる。

例えば釧路小学校では、5 年生で設定した単元「What's my favorite thing? ～お気に入りのものを紹介し合おう～」において、単元の終末に自分のお気に入りのものを表すピクトフォリオを制作し、専用ホームページにアップロードして、他附属の友達や先輩に発信しようという学習に取り組んだ。多数の相手に見てもらふことを意識すると、文字の正しさに目が行き、目的をもって正確に書こうとする様子がみられた。

また、函館小学校では、ICT 機器やネットワーク環境を活用できる単元として、5 年生で「自分の町を紹介しながら附属小の友達と交流しよう」の実践を行っている。道南にある町について紹介するために、紹介の様子を動画で収録し、それをアップロードすることで、ネットワーク上で見られるように進めている。そして、それに対するコメントを投稿してもらったり他校の子どもたちによる他地域の紹介をアップロードしてもらったりするなど、ネットワークを介した積極的な協同学習となった。

旭川中学校では、昨年度小学生が作成した画像について、それを説明する文章や、それを話題にしたショートストーリーを作成する取組を行った。iPad でスノーマン・プロジェクトの Web ページにアクセスし、そこにアップされている「食べ物」に関する画像から自分の好きなものを選択し、その定義を説明す

る英文などを書かせた。生徒は、小学生の描いた絵を見て、「この絵、上手だね」とか、「英語でサンマって何て言うか知らなかったのに、小学生は知っているんだ！」などと言いながら作業を進めていた。完成した文章を Web ページにアップすれば、この文章を用いて単語をクイズにすることができる。

### <② ときどき変換チャレンジ>

「ときどき変換チャレンジ」は、iPad の音声認識変換プログラムである「Siri」を授業で活用し、発音に対する意識を高める取組である。旭川中学校では、1 年生の発音クリニックとして 5 月下旬に実施した。ペアで約 20 台の iPad を使用し単語レベルの変換チェックを行ったが、変換エラーが多数出て、ストレスがたまる結果となってしまった。一方、授業後の生徒感想では、「発音をよくしたい」という動機づけがほぼ全生徒高まったことは前回（25 年度）と同様の結果となった。このあと、iPad を 3～4 台使用し「Siri」に世界の主な国の時間と天気をたずねて情報を収集する学習活動を行う予定である。

### <③ タブレット端末の利用>

附属学校には、大学より 45 台のタブレット端末が支給されており、授業の様々な場面で使用されている。その他、函館中学校では、1 学年から 3 学年まで生徒ひとりに 1 台ずつ小型端末（以下タブレット）が貸与されている。また、校内ネットワークサーバーが設置されており、生徒－教師間での電子ファイルの交換も可能となっている。その利点を生かし、英語の授業における生徒のスピーチなどの様子をタブレットで撮影し、録画した動画はネットワークを通じて専用サーバーに提出できることが可能となっている。教師はそれを見ながら生徒一人一人の評価がいつでもでき、また、記録された動画を生徒と一緒に見ながらフィードバックすることに役立てている。自分の過去のパフォーマンスについて振り返ることもでき、自身の成長を実感できることは大きなメリットでもある。教師側から提供したいピクチャーカードなどの視覚教材は従来、紙媒体もしくはプレゼンテーション用ソフトを使用し、プロジェクターにてスクリーンに映しだしていたが、このシステムが使用できると、生徒全員に一度にデジタル媒体として提供することもできる。

函館小・中学校の合同授業では、小学生が中学校を訪問し、中学生の一日の生活の様子についてインタビューしながら、その生活の実態を把握することがねらいであった。そのため、中学生は実際に朝起きてから家に帰宅して寝るまでの生活を撮影し、タブレットを大型テレビに接続して映像を見せながら英語で Show & Tell を行いながら説明した。小学生はその映像を見たあとにそれぞれ知りたいと思っている具体的な質問をし、それを中学生が答えるという Q&A をグループごとに行った。ICT は様々な有効に機能する。

### <④ CAN-DO リストの利用>

小学校時代にどんな活動をしてきたのか、また、取り組んできたことがどの程度理解され、使えるのかということをも CAN-DO リストを使った見取りの中で把握し、中学校でのスパイラルタイムの指導計画に生かす。これにより、指導の目標が見え、実態を把握できることで集中的に指導することができ、学習者の英語の能力差を埋めることができる。

旭川中では、スパイラルタイムでのオリエンテーション後には、CAN-DO リストの項目について、3～5 割の生徒が「ややわかる」から「だいたいわかる」へ、「だいたいわかる」から「大丈夫である」というように、良い変化が現れたと報告されている。中学入学時の早い時期から、多様な小学校から入学してくる生徒の英語の運用能力を統一したラインで図ることができ、その後の指導計画に反映することができ有効である。

### Ⅲ 研究開発の経緯

#### 1 研究開発の経過

年次	研究推進内容
＜第一年次＞	(1) 北海道教育大学英語教育プロジェクト会議（年4回） (2) 新教科「小学校英語科」の教育課程上の位置付けの検討 (3) 新教科「小学校英語科」の目標設定とカリキュラム作成 (4) 新教科「小学校英語科」評価の在り方の検討と CAN-DO リストの作成 (5) 新教科「小学校英語科」を導入後の中学校英語の目標と指導計画の見直し (6) 児童生徒実態調査（関心・意欲・態度）の実施 (7) 附属小学校・中学校間における児童生徒間交流・教師間交流の開始 (8) 「わくわく！スノーマン・プロジェクト」プレ運用開始 (9) 「どきどき！英語変換チャレンジ」実施 (10) 「スパイラルタイム」のカリキュラム開発 (11) 文字習得状況調査（中学1年・5月）の実施 (12) 評価委員会による評価の実施と次年度の方向性の検討 (13) 中学校・高等学校間の効果的な連携の在り方について検討
＜第二年次＞	(1) 北海道教育大学英語教育プロジェクト会議（年4回） (2) 小学校第1学年からの「小学校英語科」の実施 (3) 附属小学校・中学校間における児童生徒間交流の継続／海外との交流活動 (4) 附属小学校・中学校間における教師間交流の継続（年4回） (5) 1年次研究成果の評価／中学校英語の目標再設定 (6) 「わくわく！スノーマン・プロジェクト」の本格実施 (7) 「どきどき！英語変換チャレンジ」の継続 (8) 「スパイラルタイム」の実践 (9) 文字習得状況調査（中学1年・5月）の実施 (10) 児童生徒実態調査（関心・意欲・態度）の実施と研究へのフィードバック (11) 評価委員会による評価と次年度の方向性の検討
＜第三年次＞	(1) 北海道教育大学英語教育プロジェクト会議（年4回） (2) CAN-DO リストによる評価の一部実施と見直し (3) 小学生が習得する基礎的文法事項の習得状況調査と効果の測定 (4) 中間評価（成果の確認と修正） (5) 附属小学校・中学校間における児童生徒間交流の継続／海外との交流活動 (6) 附属小学校・中学校間における教師間交流の継続（年4回） (7) 接続を意識した小学校と中学校のカリキュラムの見直し (8) 「わくわく！スノーマン・プロジェクト」継続 (9) 「どきどき！英語変換チャレンジ」継続 (10) 「スパイラルタイム」の実践継続 (11) 文字習得状況調査（中学1年・5月）の実施 (12) 児童生徒実態調査（関心・意欲・態度）の実施と研究へのフィードバック (13) 評価委員会による評価と次年度の方向性の検討
＜第四年次＞	(1) 北海道教育大学英語教育プロジェクト会議（年4回） (2) 附属小学校・中学校間における児童生徒間交流の継続／海外との交流活動 (3) 附属小学校・中学校間における教師間交流の継続（年4回） (4) 「わくわく！スノーマン・プロジェクト」完成 (5) 研究の成果と効果の検証

#### 2 評価に関する取組

年次	評価推進内容
＜第一年次＞	(1) 児童生徒の実態調査（4月、2月 小学校6年生及び中学1年生） (2) 児童英検をもちいた英語の理解力診断（2月 小学校6年生） (3) 学力テストをもちいた英語力の診断（8月 中学校1年生） (4) 振り返りカードによる情意面の見取り（6月～） (5) 上記（1）～（4）の評価をもとにしたカリキュラムの検証

<p>&lt;第二年次&gt;</p>	<p>(1) 児童生徒の実態調査 (4月, 2月 小学校6年生及び中学1年生)  (2) 児童英検をもちいた英語の理解力診断 (2月 小学校5・6年生)  (3) パフォーマンステストをもちいた英語力の診断 (3月 中学校1・2年生)  (4) 振り返りカードによる情意面の見取り (6月～)  (5) 上記 (1)～(4)の評価をもとにしたカリキュラムの検証</p>
<p>&lt;第三年次&gt;</p>	<p>(1) 児童生徒の実態調査 (4月, 2月 小学校6年生及び中学1年生)  (2) 児童英検をもちいた英語の理解力診断 (2月 小学校5・6年生)  (3) パフォーマンステストをもちいた英語力の診断 (8月 中学校)  (4) 振り返りカードによる情意面の見取り (6月～)  (5) 上記 (1)～(4)の評価をもとにしたカリキュラムの検証</p>
<p>&lt;第四年次&gt;</p>	<p>(1) 児童生徒の実態調査 (4月, 2月 小学校6年生及び中学1年生)  (2) 児童英検をもちいた英語の理解力診断 (2月 小学校5・6年生)  (3) パフォーマンステストをもちいた英語力の診断 (8月 中学校)  (4) 振り返りカードによる情意面の見取り (6月～)  (5) 上記 (1)～(4)の評価をもとにした4年間の成果の検証 (11月)</p>

## IV 研究開発の効果

### 1 児童・生徒への効果

低学年への英語導入の最も大きな効果は、英単語のもつ意味をイメージで捉えさせることができることにある。札幌小学校では、新しい単語を学ぶ際に、英語の音声とともにピクチャーカードや具体物を表示し、音声と対象をつなげていく試みを行った。日本語の意味を伝えずとも、絵を表示しながら英語の音声を聞かせることで、ダイレクトに英語の音とイメージがつながり、絵や写真を見てすぐに *eggplant* や *potato* という言葉が出てくるなど、言葉に対する反応が速くなった。言葉と音声のつながりは、発話の手助けになると考える。

高学年では、インフォメーション・ギャップを利用した活動を行う中で、自分のもっている情報と異なる情報が手に入り、求めているものに辿り着いていくことへの楽しさや、そのためにコミュニケーションを図ることへの楽しさに目を向ける傾向があった。また特定の英語表現を多数の友達との交流の中で何度も使うことで自分のものにすることができたという実感を発表する子どもが多い。さらにその時間で学んだ英語を、生かせそうな他の活動や場面を考えて発表する子どももいた。

旭川小学校の6年生の実践においては、研究開発の成果として、5年生までに学習してきた語彙や表現の基礎の上に、実際のコミュニケーション場面を意識して英語を使うことができるようになったことがあげられている。形式的なやり取りに終始するのではなく、実際のコミュニケーションの場面を想定することで、英語で話すためにはどうしたらよいのかという視点で会話する児童の姿が見られたのである。

英語によるコミュニケーションを成立させるには、それを支える技能の定着が欠かせない。児童は、コミュニケーションに必要な語彙や表現を繰り返し練習して、技能の定着を図ることで、自信をもって会話することができるようになった。また、技能に関する目標に対して自己評価をすることによって、児童自身が楽しめる楽しさや喜びを実感することができ、次の学習への意欲の高まりが見られた。

さらに、フォニックスに取り組むことで発音とつづりの関係に慣れ、文字を手掛かりとして英語を覚えたり、会話したりすることができた。また、イラストとともに文字を提示したり、会話の流れを文字(文章)で提示したりすることにより、自然な形で発音とつづりの関係に気付く児童の姿が見られるようになってきたことが、小学校英語科導入の効果と言える。

一方、中学校では、小・中学校の円滑な接続を意識して導入したスパイラルタイムにおいて、以下のような成果が出ている。

旭川中学校では、中学1年生を対象に4月末に実施した「児童英検 GOLD」の結果を昨年度のデータと比較したところ、表1・表2の通り、すべての分野でその正答率が上昇しており、小学校英語科の成果の伸びを確認することができた。

表1 平成25年度の分野別正答率（GOLD）

	語句	会話	文章	文字
附属旭川中1年	68	67	69	78
全国	74	70	74	77

表2 平成26年度の分野別正答率（GOLD）

	語句	会話	文章	文字
附属旭川中1年	72	70	73	82
全国	65	63	65	71

これを基に、6月中旬の授業において、聞くこと・話すことの定着を促すため、1年生において自己紹介とやり取りを含め40秒間原稿なしで行えることを実証した。ただし、発音や文法、綴りの定着に向けてはより丁寧に行うことの必要性を実感している。また、書くことおよび文法については、基本的な書き方や文法が7月中旬に113名中8名が未定着（文の書き換え、語形変化、語順整序にて確認）。ただし、英作文としては、「自己紹介カード」作成の課題で、ほぼ全員が、量的に10文程度、自分の持ち物紹介が5文程度書くことができるようになった。今後の継続的な研究と指導を行っていききたい。

釧路中学校では、今年度4月と7月に英語の学習に関するアンケートを実施した。表3にあるように、質問項目「今まで関係ないと思っていたことも、こんなつながりがあるかと初めて知った」では、7月の調査で86.96%の生徒が学習のつながりを感じている。これは、実践を通じて、小学校での英語の内容を想起させる活動に取り組んできた結果、小学校の学びが中学校の英語の学習内容につながっていることを意識するようになった結果である。質問項目「どうすればよいかということだけでなく、どうしたら間違いになるかという理由も分かった」では、4月から7月で14.5%の増加が見られた。

ここから小学校での「聞くこと」、「話すこと」を中心とした英語に慣れ親しむ活動から、中学校で「読むこと」、「書くこと」を加えた活動を通して、英語の正確さと適切さを意識し始めている生徒が多くなったことが分かる。また、質問項目「学習した内容をこれから身のまわりの生活や社会でつかってみようと思った」では10.7%の増加が見られ、学習したことを実際に使ってみることに意欲を持っている生徒が多くなったことが伺える。

表3 英語の学習に関するアンケート結果からの抜粋（実施数：103人 4段階評価 4月と7月に実施）

質問項目 (4:よくあてはまる 3:ややあてはまる 2:あまりあてはまらない 1:あてはまらない)	肯定的回答 (%)	
	4月	7月
今まで関係ないと思っていたことも、こんなつながりがあるかと初めて知った。	78.6	86.9
どうすればよいかということだけでなく、どうしたら間違いになるかという理由も分かった。	82.5	97.0
学習した内容をこれから身のまわりの生活や社会でつかってみようと思った。	88.3	97.0

札幌中学校では、実践を続ける中で、生徒の振り返りから、「自分の力で意見を相手に伝えることができた。」「他の会話でも英語を諦めないで使うことができた。」という声があがっている。また、内容重視の、意見や考えの表現を中心とした授業を継続してきたことで、表現したいことと表現できることの距離が縮まってきたことや、普段は聞くことのなかった仲間の深い考えや鋭い意見に驚いたり、心動かされたりする様子が見られる。さらに、習得した表現をスパイラルに活用するなど、既知の表現で言いたいことを表そうとする意欲やそのための技能が高まってきている。これは、内容重視の表現活動や相手とのつながりを意識した考えや意見のやりとりがある授業を実践してきたことにより、本校で目指している英語の運用能力が向上した結果と捉え、スパイラルタイムの大きな成果と考えている。

函館中学校では、今回の授業を通して、生徒たち 71 名が授業を通してどのように実感したかアンケートを実施した結果、表 4 のようになった。

表 4 函館中学校のアンケート結果

(4...よくあてはまる 3...ほぼあてはまる 2...あまりあてはまらない 1...全くあてはまらない)

質問内容	4	3	2	1
1. 普段よりも積極的にコミュニケーションを図ることができた。	58	9	4	0
2. 小学生の質問に英語で答えることができうれしかった。	51	8	11	1
3. 授業を終えて、さらに英語を学びたいという気持ちになった。	62	6	2	1

以上の結果を考察すると、日常の学習の成果を実感できることが英語学習への動機づけにつながる事がわかる。身につけた表現を想起しながら進めるスパイラル的な学習の成果を発揮できる場面を設定することで、学習者の意欲の高まりを効果的に導きだせることが小中連携の中でも見とることができた。

これらの結果から、スパイラルタイムを取り入れ、小学校英語科での学習を活かしつつ、小中の学習のつながりを意識させながら、内容のあるコミュニケーション活動を単元構成に組み込むことで、英語を使うことに自信をもてる生徒の育成につながっていると考える。

## 2 教師への効果

小学校 1 年生からの導入を図ることにより、小学校教員全員が英語に関わることとなり、学校全体として英語をどう位置づけ、どう指導していくかという論議が生まれるようになる。また、研究を積極的にすすめることにより、児童がより一層楽しく活動するようになり、その姿によって教師の指導意欲も高まってきた。

中学校においては、教育課程内ではあるものの、「スパイラルタイム」を設定することにより、教科書を離れ、通常の授業以上に content-based を意識して、英語をツールとして使用しながら、自分の思いや相手の考えを受け入れながら活動する時間として、意識して活用するようになってきている。

## 3 保護者等への効果

保護者の期待感は大い。特に、小学校英語が導入されるという報道等がなされるたびに、現在行っている研究内容に対して、関心と理解が深まっている。グローバル社会を生きていく子どもたちにとって、情報と英語は大切な資質能力であると認識されているようである。

また、英語を教科として導入するのは、子どものより一層のコミュニケーション能力の育成のためであり、発達段階に応じて子どもの興味・関心を引きだす指導を研究するためであるとの趣旨には納得しているところである。

# V 研究開発実施上の問題点及び今後の研究開発の方向

## 1 研究開発実施上の問題点

小学校英語科の実践においては、すべての単元においてカリキュラム上の位置付けの明確化を図る必要がある。研究開発の途上にある新教科なので、なぜその学年のその時期にその単元なのか、題材設定や語彙選択の理由などを説明できるようにする必要がある。現在、カリキュラムについては精査を進め、言語の機能という視点でカリキュラムの軸が定まりつつある段階である。低学年については様々な「話題」を

設定し、子どもにとって身近に感じる言語材料に多数触れることができるようなカリキュラムになりつつある。中学年においては身近なことを表す英語も含めて、比較的簡単な英語を用いて、好きなもの・ことや欲しいものなど自分の思いや考えを伝え合うことができるようなカリキュラムになりつつある。そして高学年においては様々な事実に関することを聞いたり、話したり、読んだり、書き写したりしながら伝え合うことを重視するカリキュラムが整いつつある。

また、学びの自覚化を促す取組は継続する必要がある。英語の学習を通して、自分は「どんなことが楽しかったのか」「どんなことができるようになったのか」「どんなことがわかったのか」など学習の価値を自ら見いだすことができるようにするのである。したがって、一単位時間の終末で、学習の成果やその理由を考え交流する場面を設けたり（交流内容は可視化し撮影・記録）、振り返りカードに具体的な内容を記入したりして、それらを蓄積していくことなどを継続していく方向で考えている。

## 2 今後の研究開発の方向

### (1) 今後の課題

#### ① 小学校における課題

##### <ア 低学年と中・高学年の目標の在り方>

小学校英語科を進めていく中で、低学年で年間 17 時間という授業時数の中で教科としてどれだけのことができるのか、という問題が明らかになってきている。年間 17 時間という限られた時間の中では、扱う内容の定着を図ることや、評価を行うことが難しいのではという意見や指導助言をいただいている。それらを鑑み、次年度は低学年と中・高学年の目標や評価の在り方を再度見直し、低学年では「英語を通じて、言語や文化について体感的に理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、英語の音声や基本的な表現に慣れ親しませながら、コミュニケーション能力の素地を養う」ことを目標とし、中・高学年では「英語を通じて、言語や文化について体験的に理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、聞くこと、話すこと、読むこと、書くことなどのコミュニケーション能力の基礎を養う」ことを目標として再設定する。

##### <イ 誰が指導するか>

誰が指導するのも問題の一つである。現在、担任が指導している学校からは、高学年の指導は、やはりより専門的な知識をもった教員が指導していく方がよいという意見が出ている。その一方、すでに専科英語担当教員が指導にあたっている函館小学校では、逆に、普段の子どもたちの様子を知り、生活の中で指導をしていける担任が行うメリットに目を向け、担任が指導することを検討中である。どちらにも一長一短があり、結論はついていない。

##### <ウ ネイティブにより近い音声をいかに確保するか>

担任が中心になって進める英語の学習では、ネイティブにより近い音声をどのように子どもに与えていくかが課題となっている。担任が指導する場合でもネイティブにより近い音声を確保するため、現在は大学で開発した音声教材を使用している。

##### <エ 物的整備の必要性>

人的整備の他、物的整備も必要となる。小学校英語科の指導をできるようにするための条件を整備するため、現在、英語プロジェクトとして、学習指導要領相当資料、小学校卒業時の CAN-DO リスト、各学年のカリキュラム、学習指導案（単元計画）と教科書相当教材、小学校英語科用各種教具の作成・制作を、大学と附属小学校が協力しながら進めているところである。現在運用中のカリキュラムについては精査を進め、言語の機能という視点でカリキュラムの軸が定まりつつある段階である。

##### <オ 二極化の問題>

また、児童の英語に対する意識の問題がある。児童の具体的な姿から明らかになった課題として、英語

が得意（好き）な児童と苦手（嫌い）な児童の差が広がりつつあることが挙げられる。

今後も6年間を通して児童の興味・関心がどう高めていくのか、それと同時に評価をどのように行い、子どもに返していくのかということの検討が必要になる。「自分が英語で何を表現できるようになったのか」ということを自覚できるような振り返りの場をを導入するなど、様々に検討していく必要がある。

## ② 中学校における課題

### ＜ア 受け入れ態勢＞

中学校においては、受け入れ態勢の問題がある。現在、小学校英語科において、学習指導要領相当の資料やカリキュラムの策定、授業計画づくりが進んでいる。これにより、小学校卒業段階でどんな力をどの程度定着させたいのかをCAN-DOリストの形で示すことができると考える。したがって、中学校において作成しているCAN-DOリストは、その姿によって変更を加えていく必要がある。また、CAN-DOリストのディスクリプタが、実際の授業や生徒の変容などを踏まえたときに、どれだけ妥当性をもっているかを検証していかなければならない。加えて、英語によるプレゼンテーション力について、例えば発表姿勢や意欲・表現における向上のエビデンスをどう示すかという検討も必要である。次年度研究では、小学校で学習してきた文字や文法事項等を踏まえた習得状況を的確に把握し、内容的に深化させたカリキュラムと言語の運用能力をどこまで高めていくのかCAN-DOリストの再検討を進めていく。

### ＜イ スパイラルタイムの実践の整理＞

スパイラルタイムについては、各校でいろいろな実践を積み上げてきたが、CAN-DOリストに基づいたオリエンテーションとしての指導では、昨年度のデータにおいても附属小出身と公立小出身の生徒の差をある程度埋めることができることを確認した。また、帯的な活動やディクトグロス、異校種間の連携などについても、各校の実態を踏まえて「即時性」のあるやりとりができるような活動のフレームを検証することもできた。今後は、これらの実践を整理し、どの学校でも共通して使えるようなものにしていくことや、生徒がさらに「即時性」のあるやりとりをすることができるようにするための教材開発、加えて、年間指導計画の中に適切に効果的にスパイラルタイムを位置付けていくことも必要である。

### ＜ウ ICT機器を活用するための環境整備＞

ICTを活用にかかわっては、7月初旬、附属札幌中学校の2年生と附属旭川中学校の1年生がiPadにインストールされてあるアプリ「FaceTime」による自己紹介でのやりとりを実施した。インターネットを利用するための環境が悪く、思うような学習成果を得ることができなかった。しかし、学習後の振り返りでは、ほぼ100%の生徒がこのような学習をまたやってみたいと評価していた。インターネットを利用するための環境やICT機器の整備・充実が一層求められる。今後は、ICTを積極的に活用した授業と小中、小中、中中連携の授業実践を積み重ね、その成果をカリキュラムの中に位置付けていくことが肝要であると考えている。

## （2）外部評価委員からの意見等

平成27年2月6日（金） 北海道教育大学附属札幌中学校

外部評価委員：酒井英樹教授（信州大学）、堀田裕之指導主事（北海道教育委員会）、

末原久史指導主事（札幌市教育委員会）

### ＜① 教科型の評価について＞

パフォーマンスで評価をするには、それにあった課題を出す必要がある。評価にはいろいろな方法があるが、教科型にしていくのであれば、例えば、slowという言葉を速く言って動作化させ、児童はどう反応するのかを見とる。それにあった動きを表出している姿をみる方法などが考えられる。また次年度の研究で進めてほしい。



## <② CAN-DO リストについて>

カリキュラムにある言語の表出箇所が大切である。CAN-DO の項目がどの単元で扱われているか。どの活動とつながっているかを整理するとよい。それぞれの項目は、「小学校のどの単元とつながっているか、どの活動につながっているか、それらがどうリンクしているか」が分かることが大切である。小学校で、どんな言葉を知っているか、どんな活動を経験しているかがわかれば、小・中がつながりスパイラルタイムの発展につながっていく。

また CAN-DO を、実践を通して見直して行ってほしい。言語材料が数字だとしたら、例えば「4 匹の猿を見せながら教師が 3 monkeys 言った際、子どもが違うという反応をする。数字を聞いて 3 monkeys のように単語が言える」などが考えられる。

テスト、タスクの条件も大切である。例えば CAN-DO を「ゆっくり話されれば…」と設定するのであれば、そのことを指導しなければならない。普通の速さでは評価にならない。日常生活に必要な情報を聞いて理解できることにしても、情報量はどのくらいの場合なのか、そういった条件を細かく設定すべきである。「聞いた時にうなずきながら聞くことができる。聞こうとしている わからないことがあったら、わからないと首をかしげながら聞いている。わからないことがあったら、もう一度言ってくださいと言いながら聞いている。わからないことがあったら、より丁寧な表現で聞き返している。」など、各段階で長さ、トピック、反応などの難易度を設定することで、パフォーマンスの質をどこまで求めるかについて調整できる。

## <③ 指導者について>

小学校の文化を知っている小学校学級担任だからこそ、子どもたちに興味・関心をもたせながら、言語や文化に関する気付きを促したり、他教科との関連を図ったり、どこでつまづくかを予想したりすることができる。そのことを踏まえ、気付きを促す指導を大切にしながら、外部の人材を活用していけるとよい。指導内容は前倒ししても、指導方法を前倒ししないことが大切である。

## <④ 小・中連携について>

中学校においても、コミュニケーションを図ることを大切に授業を行って行ってほしい。授業も、英語で行うことを基本とすること。ただし、教師が英語で話せばよいものではなく、生徒が使う機会をいかにつくり出すかを大切にしながら授業をつくらせてほしい。

## <⑤ 即時的、即興的な会話について>

メモを見ながら即興的にコミュニケーションを図ることが中学校で求められていく。

## <⑥ 実施の効果（エビデンス）について>

自己評価書を見て、教師が意欲的に取り組んでいるのがわかる。児童が学習意欲を高めたというエビデンスも示してほしい。

## <⑦ 地理的な苦難、財政的な困難について>

小小・小中・中中の連携を大切に取り組んでほしい。系統的なカリキュラムの実施、教師間の交流をより活発にしてほしい。

## <⑧ スノーマン・プロジェクトや教材・教具の整備について>

引き続き、取り組んでほしい。単語ベースの言語材料として蓄積されていく有用な財産となる。

また、教師の英語運用能力を高めるとともに、音声 CD を始め、教材教具を整備して行ってほしい。例えば、教材を見てそれに言葉を付ける、続きを書く、見てどう思うか感想を述べ合う場面など、教材が有効なものになるようにし、それらを共有していけるようにしてほしい。さらに平成 27 年度から実施のカリキュラムに使用する「教材」「教科書」～児童が手に持つものとして～望ましい形を検討してほしい。

平成 26 年度

研究開発実施報告書

資料及び英語力等調査結果

北海道教育大学附属札幌小学校

外 7 校

1年カリキュラム

○言語目標 ◎コミュニケーション的目標 ☆知識、理解

時期	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12,1月	2月	3月
単元名	1-1 英語であいさし よう	1-2 虹の色は何色？	1-3 動いちゃだめだよ	1-4 いくつあるかな？	1-5 虫取りをしよう	1-6 顔と体	1-7 この野菜と果物わ かるかな？	1-8 クリスマス	1-9 動物園へ行こう	1-10 どんな乗りもので 行きますか？	1-11 進め！止まれ！
時間	2	1	2	1	1	1	3	1	2	2	1
単元の目標	○英語で挨拶をする ◎友達の名前を覚え挨拶の後に付けて言う ◎友達に笑顔、大きな声で挨拶をする ☆英語での挨拶を知る	○色の名前を聞いたり、言ったりする ◎虹の色の名前を言う *CLIL的な活動	○簡単な動作の英語を聞いたり、言ったりする ◎動作の指示を聞いてその通りの動作をしたり、止めたりする	○1～10まで数字を聞いたり、言ったりする ◎教師の質問に数字で答える	○虫の名前を聞いたり、言ったりする ◎虫の名前を言われて理解する	○体の各部の名前を聞いたり、言ったりする ◎体の一部を触れと言われて触るところができる	○野菜の名前を聞いたり、言ったりする ◎色や形のヒントで野菜の名前を言う	○クリスマス関連の語彙を聞いたり、言ったりする ☆クリスマス関連の語彙を知る	○動物園にいる動物の名前を聞いたり、言ったりする ◎クイズに答える ☆地域の動物園について知る	○乗り物の名前を聞いたり、言ったりする ◎どの乗り物が好きかと聞かれて答える ◎目的地向の乗り物の手段を聞かれて答える	○英語を聞いて理解する。 ◎英語を聞いて理解し、その通りの動作をする
主な活動	歌 Hello Song 絵本 My friend the moon 虹の色塗り じゃんけんゲーム	歌 Rainbow 絵本 My friend the moon 虹の色塗り	歌 Walking, Walking 絵本 Tiny Boppers ジェスチャー フリーズゲーム	歌 Seven Steps 絵本 Tiny Boppers クイズ	歌 ABC song Head Shoulders Vegetable Boy & Fruit Girl クイズ	歌 ABC song Head Shoulders 絵本 Teddy Bear タッチングゲーム	歌 ABC song Head Shoulders Vegetable Boy & Fruit Girl クイズ	歌 ABC song We Wish You a Merry Christmas スタンブラリー	歌 ABC song Weather song 絵本 Dear Zoo クイズ 輪投げで動物をキ ヤッチ	歌 ABC song Weather song 絵本 Dear Zoo クイズ 輪投げで動物をキ ヤッチ	歌 ABC song The Hokey Pokey サークル in, out ゲ ーム
教師	Hi, Everyone. Let's play rock n scissors. How're you doing?	What's this? This is a rainbow What color? How many colors? Let's color it ~.	Stand up. Sit down. Freeze	How many?	Let's catch a bee. flowers. honey leaves. What's this?	Touch your~. Draw three eyes.	long, small, round, big, hard, soft, sweet, sour; bitter, Guess what? vegetable, fruit arms, skirt, feet	How many?	Let's go to the zoo! animal	Who likes this one? big, small How do you go there? What's coming?	go, stop, fast, slow
児童の言語材料	Hi, Hi. rock, scissors, paper Hi, ○○. Hi, ~ 先生。 Good, thank you.	red, yellow, blue, range, green, pink, purple (indigo blue)	jump, swim, walk, run, turn, fly, kick	one, two, three, four, five, six, seven, eight nine, ten (eleven) (twelve)	butterfly, bee beetle, ladybug, grasshopper; (snail) (spider) (ant)	head, shoulders knees, toes, eyes, ears, mouth, nose,	carrot, peas, onion, tomato, potato, pumpkin, lettuce, (cucumber , corn, eggplant) apple, banana, peach, strawberry cherry, ( lemon orange, grapes,)	candle, candy cane Christmas stockings ribbon, bell, star Santa Claus	lion, tiger panda, monkey, polar bear, penguin, lesser panda, hippo, zebra, elephant, giraffe, gorilla	bike, bus, train, plane, car, ship, truck By bus. (rocket) (UFO)	up, down, in out
復習					red, one ~ ten		head, shoulders, knees, toes, eyes, ears, nose, mouth	one ~ ten	mouth, run, sleep	run, fly,	

2年カリキュラム

○言語目標

◎コミュニケーション的目標

☆知識、理解

時期	4月	5月	6月	7, 8月	9月	10,11月	12,1月	2月	3月
単元名	2-1 ジェスチャー大会	2-2 これってどんな形?	2-3 すし屋で注文しよう	2-4 家族を集めよう	2-5 ハロウィーンのお面を作ろう	2-6 好きなおやつをもらおう	2-7 20まで教えてみよう	2-8 見て!きれいだね	2-9 自然と、自分の町
時間	2	2	2	2	1	2	2	2	2
単元の目標	○英語の意味を理解し、動作で表現する ◎教師が言ったとおりに動作する	○形の名前を聞いたり、言ったりする ◎英語の形の名前を聞いてその形に似たものを日本語で言う ◎今まで学習したものの形を言う	○魚の名前を聞いたり、言ったりする ◎すし屋で魚の名前を言って注文する ☆魚の名前の言い方を知る	○家族の名前を聞いたり、言ったりする ◎お互いの言うことを理解する ☆家族の言い方を知る	○ハロウィーン関連の語を知る ☆ハロウィーンについて知る *図工と関連させる	○自分の好きなおやつを下さいと言える ○相手がほしいとおやつを渡す ◎好きなおやつを下さいと言い、受け取ってあげたりと言う ◎相手の好きなおやつをどうぞと言って渡す	○20まで言う ◎友達と、計算問題を出したり、答えたりする ☆算数の計算式を英語で知る *CLIL的な活動	○ある物の感想を表現するために形容詞を使う ◎ある物の感想を言いあったり、あいづちをうったりする ☆大喜さ、長さ、感想等の英語を感覚で理解する	○山や川などの自然を表す語句、工場や、お寺、塔等の言い方を学ぶ ◎絵、写真などを見て、名前を言うことができる
主な活動	歌ABC song Weather song チャンツ ジェスチャーゲーム	歌ABC song The days of the Week クイズ 図画	歌ABC song II The days of the Week クイズ	歌ABC song II Five Little Monkeys ジェスチャーゲーム	歌ABC song II Halloween 絵本 Boo Who ハロウィーンのお面を作る	歌ABC song II Yucky チャンツ	歌ABC song II Ten Little Snowmen チャンツ 数字早出しゲーム 足し算、引き算	歌ABC song II Bingo 絵本 Big and Little ジェスチャー	歌ABC song II Bingo 英語を聞いて絵を描く
教師	Copy me.	What's this shape? Is it ~? CD, pyramid, dice, chick	What's that? What would you like? It's under ~.	Which one is dad? Who is this?	Make a happy face.	hot, cold sweet, bitter You're welcome.	5 plus 3 is 8. 9 minus 2 is 7.	What do you think? What can you see?	What's this? What can you see?
児童	eat, drink sleep wash dance bow fly kick	circle square triangle rectangle oval	fish whale octopus squid shrimp crab tuna salmon salmon roe, egg	dad mom brother sister baby grandma grandpa black	monster jack o' lantern ghost witch happy face sad funny scared (Trick or treat)	ice cream, pie, chocolate, cookies, pancake, cake, sandwich, pudding water, milk, juice yummy, yucky B, please. Here you are. Thank you.	thirteen fourteen fifteen sixteen seventeen eighteen nineteen twenty	Look! Look! Beautiful! Yeah! big, little long short cute cool scary	What's this? mountain river, sea island tower factory shrine building old, tall
復習	jump, swim, walk, run, turn,	butterfly	fly walk	red, pink, yellow, purple, green, orange kick, jump, drink, run, turn, walk, sleep rock scissors paper	fly pumpkin happy	one ~ twelve banana, pencil	dog, cat, car, pumpkin bike, giraffe, fish, cucumber, penguin elephant, pencil, nose, funny	fish, long, ice cream whale, big, beautiful ship, white	

3年カリキュラム

\*P.F.はピクチャフォリオ

機能	④ あいさつ ① 事実を尋ねる	② 喜び、不快、質問を答え	① 事実を尋ねる、答える	② 好き嫌いを問う、答える	② 好き嫌いを問う、答える	② 欲求、願望について問う、答える	② 注意を引く、事実を尋ねる、答える	② ある物について知っているか問う、答える	② 友人に話しかける行動がわかる、理解する	① 事実情報を伝える	
時期	4月	3月	7月	8・9月	9月	10月	11月	12月	1・2月	2・3月	
単元名	3-1 世界のあいさつ 1, 2年の運動とアルファベット	3-3 気分を伝えよう	3-4 算数の問題を解いてみよう	3-5 すしは好きですか?	3-6 どんなマクガップが好きですか?	3-7 クリスマスのプレゼントは何ですか?	3-8 落ち物が誰のものか確かめよう	3-9 ヒントをもとに考えよう	3-10 友達を誘おう	3-11 自分のことを伝えよう	
時数	3時間	3時間	3時間	3時間	3時間	3時間	3時間	3時間	3時間	3時間	
単元目標	世界のあいさつについて英語であいさつしたりする活動を通して、世界にはたくさんの国と言葉があることを知り、英語であいさつをする際の表現の技能を身に付け、積極的に友達とあいさつしようとする。	ジェスチャーや絵カード等を用いて行うゲーム等の活動を通して、How are you? に対する答え方やジェスチャーの種類がわかることになり、自信を持ってあいさつできるようになる。	英語で出席番号が呼ばれたら返っていくゲームをする活動 ・英語で数字ビンゴやカードゲームをする活動 ・英語で数字ビンゴやカードゲームをする活動 ・英語で簡単な計算問題や計算を伴う文算問題を解く活動	好きな食べ物や教科等を尋ね合う活動を通して、外来語と英語の音の上の類似点や相違点に気付くことができる。また、あいさつや好きな食べ物や教科等を尋ね合う活動に積極的に参加し、自信を持ってあいさつできるようになる。	友達に好きなものを尋ねながら、好きなマクガップのことを指し示して、そのジャンルの中で、自分の好きなものを紹介し、友達に勧めようとする。	友達に好きなものを尋ねながら、好きなマクガップのことを指し示して、そのジャンルの中で、自分の好きなものを紹介し、友達に勧めようとする。	クリスマスプレゼントとして欲しいものを尋ねる活動を通して、そのジャンルの中で、自分の好きなものを紹介し、友達に勧めようとする。	文房具等の持ち主を探し活動を通して、日本語と英語における文房具の言い表し方の違いに気付く。所有者がどのような文房具を持っているか、自分の持っている文房具の持ち主を積極的に伝えようとする。	友達を遊びに誘う場面をもとにしたゲームやスキットを行う活動を通して、様々な遊びを表す英語を知り、勧誘したり承諾したり断つたりするたのめ表現の技能を身に付け、積極的に友達を遊びに誘おうとする。	英語による自己紹介を聞いたり、自己紹介をしたりする活動を通して、相手の理解しやすさや、伝えたい内容を伝える際の表情、態度等々を身に付け、積極的に友達とあいさつしようとする。	
主な活動	・世界のあいさつは「は」がどのようには発音されるのかを聞き比べながら、なぜ英語を学ぶのかを英語で説明できるようにする活動 ・アルファベットを用いた各種ゲーム活動	・あいさつの場面で気分を伝え合う場面でのDVDを視聴する活動 ・気分を表すジェスチャーをする活動 ・相手の気分を聞いて、それに合った絵カードを選挙する活動	・英語で出席番号が呼ばれたら返っていくゲームをする活動 ・英語で数字ビンゴやカードゲームをする活動 ・英語で簡単な計算問題や計算を伴う文算問題を解く活動	・食べ物や教科等を尋ね合う活動を通して、外来語と英語の音の上の類似点や相違点に気付くことができる。また、あいさつや好きな食べ物や教科等を尋ね合う活動に積極的に参加し、自信を持ってあいさつできるようになる。	・たくさん種類があるものの中から、好きなものを尋ね合う活動 ・好きなマクガップを聞いて、どのジャンルのマクガップのことか当てる活動 ・好きな色、形、食べ物、スポーツ等を聞きながら、友達にマクガップを勧めようとする活動	・絵カードを見ながら、クリスマスプレゼントとして欲しいものを英語で言う活動 ・欲しいものを尋ね合ったり、プレゼント交換したりする活動 ・ゲーム、マンガ、本、おもちゃ等のジャンルの中で、さらに具体的に欲しいものを尋ね合おうとする活動	・教室の備品等の写真を拡大したりモザイク加工したりした物を見て、それが何かを英語で言う活動 ・教室の備品の近くにあるものや遠くにあるものを使って英語でビンゴをする活動 ・身近なものを挙げて、ブックボックスクイズ、3ヒントクイズ等ヒントをもとに対象物を言い当てる活動	・文房具の名前を聞いたり言ったりする活動 ・文房具が相手のものかどうか尋ねる場面でのDVDを視聴する活動 ・文房具の持ち主を探し活動をする	・教室の備品等の写真を拡大したりモザイク加工したりした物を見て、それが何かを英語で言う活動 ・教室の備品の近くにあるものや遠くにあるものを使って英語でビンゴをする活動 ・身近なものを挙げて、ブックボックスクイズ、3ヒントクイズ等ヒントをもとに対象物を言い当てる活動	・友達を遊びに誘う場面でのDVDを視聴する活動 ・友達を絵カードに描かれた遊びに誘うゲーム活動 ・グループで友達を誘ったり遊びに誘う場面でのスキットをする活動	・いろいろな人の自己紹介DVDを視聴し、聞き取った名前、出身地、年齢、居住地等を、年輪、居住地等を、相関したDVDの内容で、自分の名前、出身地、居住地、趣味、持ち物等の内容を、英語で紹介する活動
評価規程	世界の言葉で進んであいさつしようとしている。 ・ Good morning 等の表現の技能を身に付けている。 ・ 世界にはたくさん国や言葉があることに気付いている。	自分の気分を喜んで友達とともに伝えようとしている。 ・ I'm good. I'm great. 等の表現の技能を身に付けている。 ・ 気分を表す英語やジェスチャーは様々なことに使われている。	数字を用いて、進んでビンゴや計算問題に取り組もうとしている。 ・ 1~100までの数字を英語で表すことができる。 ・ 似たような音のものがあることに気付いている。	好きな食べ物や教科等を尋ねたり、自分の好きなものを尋ねたりしようとしている。 ・ What color, design do you like? 等の表現の技能を身に付けている。 ・ 友達は様々なことに使われている。	欲しいものを尋ねたり、自分の欲しいものを友達とともに進んで伝えようとしている。 ・ What do you want for Christmas? 等の表現の技能を身に付けている。 ・ I want ~, 等の欲しいものを表現の技能を身に付けている。 ・ 具体的な表現のたのめ表現があることに気付いている。	クリスマスプレゼントとして欲しいものを尋ねる活動を通して、そのジャンルの中で、自分の好きなものを紹介し、友達に勧めようとする。	所有者がどのような文房具を持っているか、自分の持っている文房具の持ち主を積極的に伝えようとする。	何か尋ねたり答えたりしようとしている。 ・ What's this? What's that? 等の何かを尋ねる表現の技能を身に付けている。 ・ 近くのものや遠くのものや指す場合の表現の技能を身に付けている。 ・ 日本語と英語における文房具の言い表し方の違いに気付いている。	勧誘したり承諾したりする表現を用いて、友達を遊びに誘おうとする。 ・ Let's ~, Sure. 等の勧誘や承諾をする表現の技能を身に付けている。 ・ 遊びを表す日本語と英語の違いに気付いている。	自分のことを進んで友達に伝えようとする。 ・ I'm from ~, I live in ~, I like ~, I have ~, student	
言語材料	How do you say ~ in English? Good morning. Good-bye. Good night.	I'm good. I'm great. I'm sleepy. I'm tired. I'm hot. I'm hungry. Oh, really. Oh, yeah. food, pillow chair, handkerchief ice, blanket, smile	How many? one ~ one hundred Twelve plus thirty is forty-two. Fifty minus eighteen is thirty-two. book, mirror, I have ~, I read ~, one ~ twenty	I like tuna. I don't like salmon. Which ~ do you like? Do you like apples? Yes, I do. No I don't. spaghetti, pizza, curry, omelet, chicken, steak, math, English, music, Japanese, P.E., science, social studies	What color / design do you like? I want ~. What ~ do you want? game, toy, comic book, dress	What do you want for Christmas? I want ~. What ~ do you want? game, toy, comic book, dress	What's this? What's that? clock, microscope, ice pack, blanket, blackboard, chair, desk, mirror, magnet	Excuse me. Is this your ~? Yes, it's my ~. Thank you. You're welcome. It's not ~. pencil, eraser, ruler, notebook, glue	What's this? What's that? animal, food 関連に関する言葉 スリーヒントクイズ	Hi, Let's ~. Sure. Nah...sorry. play catch(baseball, tennis, dodge ball)	I'm ~. I'm from ~. I live in ~. I like ~. I have ~. student
取組		気分や状態を表す表現と関連語で進んで	教科導入を連想クイズで行う	Dear Santa	○	animal, food 関連に関する言葉					
能力		気分や状態を表す表現と関連語で進んで	教科導入を連想クイズで行う	Dear Santa	○	animal, food 関連に関する言葉					
絵本	Today is Monday		Spot Can Count					Let's play		Me Myself	
P.F.					○	○				○	



5年カリキュラム

\*P.F.はピクトフォリオ

機能	①事実を質問し、答える	①事実報告、質問、答える	②事実母ねる、答える	①事実報告、その他	②興味を表現 ⑤誰かの意見を母ねる	①興味を表現 ⑤誰かの意見を母ねる	①事実報告 母ねる、答える ②興味を表現 ⑤例示する	④あいさつ ①事実報告 告、質問、答える ④あいさつ ④注意を引く ①②⑤⑥	②謝罪 謝罪受け入れ ③何かをするように要求 ②感謝	
時期	4月	5月	6月	7月	8・9月	10月	11・12月	1・2月	2・3月	
単元名	5-1 今何しているの	5-2 自分の日課を見直そう	5-3 運動会はいつですか	5-4 五感をもとに表現しよう	5-5 様子を伝えよう	5-6 自分のお気に入りのものを紹介しよう	5-7 自分の町を紹介しながら、附属小の友達と交流しよう	5-8 附属小以外の人とお話をしよう	5-9 場面を考えよう CS スキット	
時数	4時間	4時間	4時間	4時間	4時間	4時間	5時間	2時間	2時間	
単元の目標	第三者がしていることを尋ね合ったり、動きを通して、動きを表す言葉の変化の仕方に関心を持ち、世界には時差があり、それぞれの生活時間や習慣が違ったりすることを尋ねたり、答える表現の技能を身に付け、積極的に伝え合おうとする。	日本や海外にいる友達の日々の生活時間を尋ね合う活動を通して、世界には時差があり、それぞれの生活時間や習慣が違ったりすることを尋ねたり、答える表現の技能を身に付け、積極的に伝え合おうとする。	誕生日や特別な日を紹介し、それぞれの理由を確認する活動。 ・誕生日や行事の日などの月日の言い方や尋ね方を理解して、話す活動 ・世界と日本の祭りの行事の時期や季節などの違いを気付く活動	対象物を伝え合う活動を通して、日本語と英語の違いに気付く、五感を使って感じたことを表現する技能を身に付け、感受性豊かに積極的に表現しようとする。	人の性格や様子を伝え合う活動を通して、性格や様子を表す言葉の違いに気付く、五感を使って感じたことを表現する技能を身に付け、積極的に表現しようとする。	自分の町のお気に入りのものを紹介する活動を通して、日本語と英語の違いに気付く、五感を使って感じたことを表現する技能を身に付け、積極的に表現しようとする。	自分の町のお気に入りのものを紹介する活動を通して、日本語と英語の違いに気付く、五感を使って感じたことを表現する技能を身に付け、積極的に表現しようとする。	自分の町のお気に入りのものを紹介する活動を通して、日本語と英語の違いに気付く、五感を使って感じたことを表現する技能を身に付け、積極的に表現しようとする。	大学生等に自分の考えや気持ちを伝える活動 ・反応を大切に、進んで会話を続ける活動 ・簡単な英語を使って、工夫しながら話す活動	様々な表現を実際によく使う表現を場面を通して、自分の考えや気持ち等を積極的に伝え合おうとする。
主な活動	・動きを表す言葉を知る活動 ・していることを母ねる表現を学ぶ活動 ・していることを答える表現を学ぶ活動 ・同時に友達から電話が着たとき、何をしていたのか答える活動 ・0時に友達と電話をして、していることを母ね合う活動	・ALTの日本や外国での生活時間を聞く活動 ・友達の一日の生活時間を尋ねたり、答えたりする活動 ・自分の日課を発表する活動 ・世界には時差があり、それぞれの生活時間や習慣が違ったりすることに気付く活動	・特別の日を紹介し、それぞれの理由を確認する活動 ・誕生日や行事の日などの月日の言い方や尋ね方を理解して、話す活動 ・世界と日本の祭りの行事の時期や季節などの違いを気付く活動	・目で見たり感じた英語、音で聞いた感じ、感触、におい、味等を表す英語をそれぞれ使って対象物を表現する活動	・人の性格や様子を表現する活動 ・Show and Tell で発表する等工夫しながら伝えようとする活動	・自分の町のお気に入りのものを紹介する活動 ・伝えたいことを物や文字等を使って伝える活動	・大学生等に自分の考えや気持ちを伝える活動 ・反応を大切に、進んで会話を続ける活動 ・簡単な英語を使って、工夫しながら話す活動	・自分の町のお気に入りのものを紹介する活動 ・伝えたいことを物や文字等を使って伝える活動	・大学生等に自分の考えや気持ちを伝える活動 ・反応を大切に、進んで会話を続ける活動 ・簡単な英語を使って、工夫しながら話す活動	様々な表現を実際によく使う表現を場面を通して、自分の考えや気持ち等を積極的に伝え合おうとする。
評価規準	問：していることを尋ねたり答えたりする表現を用いて、友達とともに進んで楽しく伝え合おうとしている。 技：What are you doing? I'm studying 等の表現を用いて、友達とともに進んで楽しく伝え合おうとしている。 知：世界には時差があり、生活時間や習慣の違いがあることに気付いている。	問：動作や時刻を表す表現を用いて、自分の生活時間を選んで伝えようとしている。 技：I get up at ~等の一日の生活に関する表現の技能を身に付けている。 知：世界には時差があり、生活時間や習慣の違いがあることに気付いている。	問：月日に関する表現を用いて、特定の月日について進んで伝え合おうとしている。 技：When is your birthday? My birthday is ~,等の月日に関する表現の技能を身に付けている。 知：日本と外国の祭りの行事の時期や季節の違いに気付いている。	問：感じたことを表す表現を用いて、自分の思いを進んで伝えようとしている。 技：I see ~ Looks ~等の感じたことを表す表現の技能を身に付けている。 知：日本語と英語の違いに気付いている。	問：性格や様子、同意や反対を表す表現を用いて、自分の考えを進んで伝えようとしている。 技：I like ~, It's ~等の自分の考えや気持ちを表す表現の技能を身に付けている。 知：日本語と英語の違いに気付いている。	問：自分の考えや気持ちを表す表現を用いて、進んで伝えようとしている。 技：I live in ~, I like ~, This is ~, It's ~等の表現の技能を身に付けている。 知：自分の町のよさや他の町の違いに気付いている。	問：言葉や文字を用いて、初対面の人に進んで自分のことを紹介したり、相手のことを質問したりしようとしている。 技：That's OK. Go ahead, Oh, really? Are you sure?等の既習事項を活用している。 知：相手の反応を確かめながら話すことの大切さに気付いている。	問：既習事項を用いて、初対面の人に進んで自分のことを紹介したり、相手のことを質問したりしようとしている。 技：How about you? Oh, really? Are you sure?等の既習事項を活用している。 知：相手の反応を確かめながら話すことの大切さに気付いている。	問：既習事項を用いて、初対面の人に進んで自分のことを紹介したり、相手のことを質問したりしようとしている。 技：That's OK. Go ahead, Oh, really? Are you sure?等の既習事項を活用している。 知：相手の反応を確かめながら話すことの大切さに気付いている。	問：よく使う表現を用いて、進んで伝え合おうとしている。 技：That's OK. Go ahead, Oh, really? Are you sure?等の既習事項を活用している。 知：相手の反応を確かめながら話すことの大切さに気付いている。
言語材料	What is he / she doing? He / she is playing soccer. eating, studying, cleaning, watching, running, walking, reading, watering	What time did you get up? I get up at ~. eat breakfast / lunch / dinner at ~. come to school, go home	January ~ December 1st ~ 31st When is your birthday? My birthday is ~. When is the sports day?	eyes, ears, nose, hands, mouth, Smells ~. Tastes ~, beautiful, funny, noisy, quiet, sweet, bad, soft, hard, beautiful, sweet, bitter, hot, sour, spicy. It looked like ~.	~ is great. What do you think? great, kind, smart, funny, interesting, cool, famous I think so too. I don't think so. He / She is great.	I have ~. This is ~. I like ~. It's ~. I got it at ~. Do you know ~? Do you like ~?	I live in ~. I like ~. This is ~. It's ~.	Speak slowly, please. Sorry? Go ahead. Thanks. One more time, please. How about you? Oh, really? Are you sure?	Sorry. That's OK. Go ahead. Thanks.	
既習	動作関連語彙	数字	序数	形容詞、食物関連その他の語彙	形容詞	形容詞その他	自然、施設関連語彙	言い換え、ごく簡単な文	既習の語彙、表現すべて	
英語略				五感を利用して、物の性質を表現し、言い換える練習	言い換え、ごく簡単な文	言い換え、ごく簡単な文	言い換え、ごく簡単な文	言い換え、ごく簡単な文		
絵本				It looked like spilt milk.	Show and Tell					
P.F.										

6年カリキュラム

\*P.F.Fはピクトフォリオ

機能	④あいさつ、注意をひく、知人に話しかける①事実報告	文字による情報、伝達①事実報告、質問、尋ねる	①事実報告、尋ねる、答える⑤例示する	文字による情報、伝達①事実報告、質問、尋ねる	②欲求、願望①事実報告	①事実を質問し、答える②興味を表現⑤誰かの意見を尋ねる	②欲求、願望①事実報告	①事実を質問し、答える②興味を表現⑤誰かの意見を尋ねる	
時期	4月	5月	6・7月	8・9月	10月	11・12月	1月	2・3月	
単元名	6-1 ごみ出しの曜日を伝えよう	6-2 物語を読もう	6-3 海外の人を日本食でおもてなし	6-4 日本を紹介しよう	6-5 The Lonely Monsterの友達をつくろう	6-6 行ってみたい外国は？	6-7 場面を見て台詞を考えよう	6-8 将来の夢	
時数	5時間	3時間	4時間	5時間	5時間	5時間	2時間	6時間	
単元の目標	ごみ出しのルールについて知り、日本と海外でのごみ出しのルールの違いに気付かせ、ごみの種類、曜日や時刻を表す表現の技能を身に付け、積極的にごみ出しのルールについて知らせようとする。	“The Detective Boys”の読み聞かせを聞く活動 ・難しいうちに着目し、読みや高味を確認してから再度読み聞かせを聞く活動 ・リピートしたり、一緒に声に出したりする活動 ・物語の登場人物が誰なのかを考えた活動 ・自分で物語を読む活動	グループで海外の人をもてなす活動を通して、日本食は世界遺産であることやそのよきや価値に気付かせ、既習事項や言い換えを活用して、積極的に日本食について説明しようとする。	外国人に日本を紹介する活動を通して、日本と外国の文化や行事や言い換えに気付かせ、既習事項や言い換えを活用して、積極的に日本のことについて説明しようとする。	“The Lonely Monster”の読み聞かせを聞く活動 ・難しいうちに着目し、読みや高味を確認してから再度読み聞かせを聞く活動 ・He has ～、He likes ～、He was ～ingの表現を身に付ける活動 ・物語の内容を、言い換えて表現する活動 ・オリジナルのモンスターを考え、物語の続きを書く活動	様々な国名の言い方を知る活動 ・世界遺産や外国の生活の様子を知る活動 ・行ってみたい国を尋ねたり、行ってみようとする活動 ・自分の行ってみたい国とその理由を紹介する活動	これまでに学習した表現のうち、質問の形になっているものを思い出す活動 ・視覚資料を見て、何を話しているのかを想像する活動 ・資料に適したせりふをグループまたはペアで考えてみる活動 ・順に発表し合い、それぞれの作品の意図を交流する活動	将来の夢を伝える活動を通して、職業を表す言葉の違いに気付かせ、将来の夢について、興味をもつ言葉の言い換えや、職業を表す単語や、既習事項や言い換えを活用して、自分の将来の夢を積極的に伝え合おうとする。	
主な活動	・自分の家の隣に外国の人が引っ越してきたという内容のストーリーを聞く活動 ・ごみの種類を表す英語を知る活動 ・曜日やごみの種類、時刻などの表現を身に付ける活動 ・英語版ごみ分別カレンダーを作る活動 ・カレンダーを使ってごみの分別について紹介し合う活動	・英語の文章を目で追い、進んで声に出したり内容について英語で尋ねたり答えたりしようとする。 ・英語の音声を聞き、物語の内容について、尋ねたり、答えたりする表現の技能を身に付けている。 ・文字と音のつながりに気付いている。	・既習事項を用いて、進んで日本食について説明しようとしている。 ・This is ～、It's ～等の既習事項や言い換えの表現を身に付けている。 ・日本食のよきや価値に気付いている。	・日本の伝統的な行事遊びなどについて説明する活動 ・それらを外国人(ALT、JICA研修生、留学生など)に簡単な英語で伝える活動 ・既習事項を活用して、どのように伝えるかを考える活動 ・実際に紹介したり、児童同士で英語の発表を聞き合い、何についての説明なのかを当てたりする活動	・“The Lonely Monster”の読み聞かせを聞く活動 ・難しいうちに着目し、読みや高味を確認してから再度読み聞かせを聞く活動 ・He has ～、He likes ～、He was ～ingの表現を身に付ける活動 ・物語の内容を、言い換えて表現する活動 ・オリジナルのモンスターを考え、物語の続きを書く活動	・様々な国名の言い方を知る活動 ・世界遺産や外国の生活の様子を知る活動 ・行ってみたい国を尋ねたり、行ってみようとする活動 ・自分の行ってみたい国とその理由を紹介する活動	・これまでに学習した表現のうち、質問の形になっているものを思い出す活動 ・視覚資料を見て、何を話しているのかを想像する活動 ・資料に適したせりふをグループまたはペアで考えてみる活動 ・順に発表し合い、それぞれの作品の意図を交流する活動	・将来の夢スピーチのモデル動画を観る活動 ・様々な職業の表現を知る活動 ・様々な職業の表現を身に付ける活動 ・将来の夢についてのスピーチパターンを知る活動 ・自分の発表する内容を考える活動 ・将来の夢についてのスピーチを発表する活動	
評価規準	・ごみの種類、曜日や時刻を表す表現やジェスチャー等を用いて、進んでごみの分別について伝えようとしている。 ・Please put out ～ on ～等の曜日とごみの種類を組み合わせた表現の技能を身に付けている。 ・ごみの種類の表現について、日本語との共通点や相違点から、その面白さに気付いている。	・英語の文章を目で追い、進んで声に出したり内容について英語で尋ねたり答えたりしようとする。 ・英語の音声を聞き、物語の内容について、尋ねたり、答えたりする表現の技能を身に付けている。 ・文字と音のつながりに気付いている。	・既習事項を用いて、進んで日本食について説明しようとしている。 ・This is ～、It's ～等の既習事項や言い換えの表現を身に付けている。 ・日本食のよきや価値に気付いている。	・日本の伝統的な行事遊びなどについて説明する活動 ・それらを外国人(ALT、JICA研修生、留学生など)に簡単な英語で伝える活動 ・既習事項を活用して、どのように伝えるかを考える活動 ・実際に紹介したり、児童同士で英語の発表を聞き合い、何についての説明なのかを当てたりする活動	・“The Lonely Monster”の読み聞かせを聞く活動 ・難しいうちに着目し、読みや高味を確認してから再度読み聞かせを聞く活動 ・He has ～、He likes ～、He was ～ingの表現を身に付ける活動 ・物語の内容を、言い換えて表現する活動 ・オリジナルのモンスターを考え、物語の続きを書く活動	・様々な国名の言い方を知る活動 ・世界遺産や外国の生活の様子を知る活動 ・行ってみたい国を尋ねたり、行ってみようとする活動 ・自分の行ってみたい国とその理由を紹介する活動	・これまでに学習した表現のうち、質問の形になっているものを思い出す活動 ・視覚資料を見て、何を話しているのかを想像する活動 ・資料に適したせりふをグループまたはペアで考えてみる活動 ・順に発表し合い、それぞれの作品の意図を交流する活動	・将来の夢スピーチのモデル動画を観る活動 ・様々な職業の表現を知る活動 ・様々な職業の表現を身に付ける活動 ・将来の夢についてのスピーチパターンを知る活動 ・自分の発表する内容を考える活動 ・将来の夢についてのスピーチを発表する活動	
既習	曜日、時刻	既習の言葉	既習表現すべて、特に食物関連言葉	既習の言葉	既習の言葉	既習の表現児童に選択させる	既習事項を用いて、将来なりたい職業や夢について、進んで尋ねたり答えたりしようとしている。 ・技：I want to be a(an) ～、I'm good at ～、等の既習事項を身に付けている。 ・知：日本語と英語での職業を表す語の成り立ちを知る活動を通して、言葉の面白さに気付いている。	既習事項を用いて、将来なりたい国とその理由について、進んで伝え合おうとしている。 ・技：What country do you want to go? I'd like to go to ～ 等の既習事項を身に付けている。 ・知：世界の様々な国やその生活の様子の違いに気付いている。	既習事項を用いて、将来なりたい国とその理由について、進んで伝え合おうとしている。 ・技：What country do you want to go? I'd like to go to ～ 等の既習事項を身に付けている。 ・知：世界の様々な国やその生活の様子の違いに気付いている。
言語材料	Please put out ～ on ～ before ～. plastic bottles, cans, milk cartons, garbage, paper, plastic	detective like ～. drop (dropped), fell from He's gone. was wearing ～ give (gave) say (said) be made of ～	This is ～. It's ～. rice, vinegar, sugar, salt, beef, hot water, soy sauce, green tea, flavor, chicken, shrimp, pudding	new year, otoshidama, shrine, setsubun, doll festival, children's day tamabata, origami, gata It's made of ～. It's like ～.	be made of ～ turned to look ～ book like saw, walked, got	I want to go to ～. Because I want to go to ～. (see, eat, try) It's ～. help What country do you want to go to? The United States . America France, India	What is he / she ～ing? When did you ～? When is ～? What do you think?	I want to be a / an ～. I'm good at ～. I like ～. I want to help ～. Thank you. scientist, astronaut, nurse, novelist, pastry chef, cook baseball player, vet	
習	曜日、時刻	既習の言葉	既習表現すべて、特に食物関連言葉	既習の言葉	既習の言葉	既習の表現児童に選択させる	既習事項を用いて、将来なりたい国とその理由について、進んで伝え合おうとしている。 ・技：I want to be a(an) ～、I'm good at ～、等の既習事項を身に付けている。 ・知：日本語と英語での職業を表す語の成り立ちを知る活動を通して、言葉の面白さに気付いている。	既習事項を用いて、将来なりたい国とその理由について、進んで伝え合おうとしている。 ・技：I want to be a(an) ～、I'm good at ～、等の既習事項を身に付けている。 ・知：世界の様々な国やその生活の様子の違いに気付いている。	
能力	10 things I can do to help my world	The Detective Boys	既習表現すべて、特に食物関連言葉	既習の言葉	既習の言葉	既習の表現児童に選択させる	既習事項を用いて、将来なりたい国とその理由について、進んで伝え合おうとしている。 ・技：I want to be a(an) ～、I'm good at ～、等の既習事項を身に付けている。 ・知：世界の様々な国やその生活の様子の違いに気付いている。	既習事項を用いて、将来なりたい国とその理由について、進んで伝え合おうとしている。 ・技：I want to be a(an) ～、I'm good at ～、等の既習事項を身に付けている。 ・知：世界の様々な国やその生活の様子の違いに気付いている。	
P.F.	○	○	○	○	○	○	○	○	



ピクトフォリオ制作に関わって

**\* 3～6年の〇をつけた単元の中に組み込む**

機能	※設定する単元で取り扱う言語機能に準ずる
時期	※ピクトフォリオ制作を設定する単元に準ずる
単元名	※ピクトフォリオ制作を設定する単元に準ずる
時数	※年間で1～2時間
単元の目標	※ピクトフォリオ制作を設定する単元の目標に準ずる。
主な活動	・単元の学習内容に関わるピクトフォリオ(対象となるもの・ことを表す絵+英単語や簡単な英語表現がA4×1ページに表されたカード)を制作する。 ・スノーマン・プロジェクトに登録されているピクトフォリオをダウンロードして単元の学習で活用する。
評価規準	<b>関</b> ：ピクトフォリオを制作しながら、自分の思いや興味・関心のあるもの・ことについて進んで絵と文字で伝えようとしている。 <b>技</b> ：単元の学習内容に関するもの・ことを表す英単語や簡単な英語表現を讀んだり書き写したりしている。 <b>知</b> ：英単語や簡単な英語表現が表すもの・ことの意味やイメージの多様性や英語の音声と文字の関連等に気付いている。
言語材料	当該単元で扱っている表現 絵本の表現
既習	ピクトフォリオ制作を設定するまでに実施した単元で扱ってきた表現
学習段階	既習表現の中から、ピクトフォリオに表したいもの・ことに適したものを選択する。
絵本	※当該単元で取り扱う絵本や、必要に応じて取り入れる絵本
P.F.	※当該単元で活用が考えられる場合は、この欄に〇を付けてある。

**1. 言語機能分類**

①事実を告げる、尋ねる、伝える

②意見、判断、考え等を表現し見つけ出す	②好きな物について聞いて答える	②喜び、不快、疑問について、答える	②ある物について知っているか問う答える	②友人や知人に話しかける
②不快を問う、答える	②元気づける	②興味を表現、入れ	②感謝	

③様々なことを行わせ、行動方針を提案する、同意を要求する

④社交的行動をする

⑤デイスコースを組み立てる

⑥もっとゆつくり話すように頼む

**3. 語彙の出発箇所(学年-Lesson)**

名詞	色 形 数 動物 虫、魚 食物 家族 乗り物 体 自然 文具 洋服 スポーツ 学校 職業 国 その他 曜日 月 教科 Be動詞 動作動詞 日常動作 状態動詞 助動詞can 過去 過去分詞 性質、状態 色 形 体調 味 状態 場所 時間、他 動詞+前置詞、副詞	1-2 2-2 1-2 1-9 1-4 1-11 2-7 1-10 1-6 2-9 3-6 3-7 3-10 4-6 4-1 5-3 3-7 warm up warm up warm up all 1-6 2-4 3-5 5-8 4-5 warm up 6-3 2-5 6-6 1-2 1-7 warm up 2-6 1-11 4-5 1-4 5-2 6-2 5-2 6-3	1-8 1-9 2-7 3-4 4-8 5-2 4-8 6-4 2-2 4-7 5-8 3-9 4-5 6-8 6-7 3-9 6-2 5-3 2-1 5-2 3-7 6-8 5-2 6-3 4-1 2-2 4-7 5-4 2-4 4-3 6-3	2-8 3-4 5-2 4-8 6-5 1-9 1-8 2-7 3-4 4-4 5-7 6-5 6-8 6-2 6-4 6-7 4-5 6-6 4-2 4-7 5-4 5-6 6-6 5-5 5-4 6-7 6-7
動詞	動詞	1-11 4-5	4-5	
形容詞	形容詞	1-4 2-6 5-2 6-3	4-3 6-6	

**4. 内容の広がり(冊から世界へ)**

自分について伝える  
家族、他について伝える  
自分の学校、町、日本を知る伝える  
外国について知る

3-11	5-6	5-7	6-8
4-1	4-2	5-5	5-6
1-9	4-6	4-8	6-2
1-8	2-5	3-1	5-3

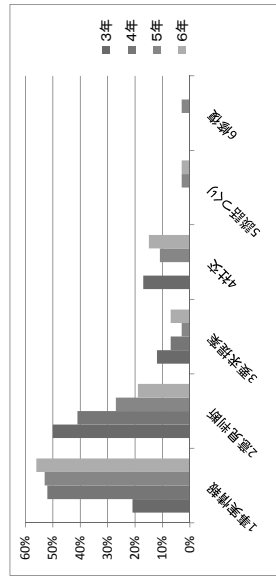
**5. 言語的能力(〇をい書き)**

①書き慣え  
書き慣えのレベル  
Hello, Thank you, How're you doing?  
Sorry? What's wrong? What's ~ in English?  
How about you? One more time, please. Oh, really. Are you sure?

低学年  
中学年  
高学年

**2. 言語機能の各学年における割合**

3年	①5 21%	②12 50%	③3 12%	④4 17%
4年	①14 52%	②11 41%	③2 7%	
5年	①16 53%	②8 27%	③1 3%	④3 11%
6年	①15 58%	②5 19%	③2 7%	④4 15%



平成 26 年度

研究開発実施報告書

英語力等調査結果

北海道教育大学附属札幌小学校

外 7 校

# 附属小学校外国語活動を経験した学習者の英語能力と情意面の変化

## 1. はじめに

本稿では北海道教育大学附属小学校における外国語活動を経験した学習者の英語能力と情意面の変化を明らかにするために、小学校6年生が中学校1年生になるまでの英語能力と情意面の変化を経年的な比較を試み、その変化の特徴を明らかにするとともに、英語能力と情意面の変化がどのように影響しているかについても検討した。

## 2. 研究方法

### 2.1 参加者

小学校外国語活動を経験した学習者の英語能力と情意面の経年的な変化を測定するために、北海道教育大学附属小学校（4校）と中学校（4校）に在籍する学習者を参加者とした。小6から中1までの経年的変化を測定するために、対象を小6（2013年度）と中1（2014年度）とし、附属小学校から附属中学校へ進学した学習者のみ抽出した。また、学習者の英語能力を測定するために、児童英語検定 GOLD を実施し、情意面を調査するために質問紙調査を小学校6年生と中学校1年生の際に実施した。その際、児童英検・質問紙調査いずれかの調査に参加しなかった参加者と無回答がある、同一の回答が続くなど不適切な回答のある参加者を除外した。その結果、193名の参加者となり、小6の有効回答率は69.68%、中1は45.41%となった（表1 児童英語検定と質問紙調査は小6が2013年の4月下旬、中1が2014年4月下旬に実施され、何れも同年5月下旬までに回収された。

### 2.2 英語能力の測定

学習者の英語能力の経年的な変化を測定するために、児童英検検定 GOLD を利用した。児童英検 GOLD は9題、50問で構成されており、出題分野別に分類すると、語彙が14問、会話が9問、文章が17問、文字が10問であった。

### 2.3 学習者の情意面

学習者の情意面の経年的な変化を測定するために、質問紙調査を採用し、萬谷他（2013）で使用した30項目を採用した。回答は萬谷他（2013）と同様に、具体的心理傾向をたずねる30項目について、1(全くそう思わない)・2(そう思わない)・3(そう思う)・4(非常にそう思う)の4段階の評価を用いた。質問項目は日本語で行った。

### 2.4 学習者の英語能力と情意面の変化との関係

最後に、学習者の英語能力と情意面の変化との関係を明らかにするために、小6と中1の児童英検 GOLD の合計点を基に、学習者の英語力を上位・中位・下位の3群に分け、小6・中1×英語力（上位・中位・下位）を独立変数、因子分析で得られた各因子の因子得点を従属変数として2元配置分散分析を行った。

## 3. 結果

### 3.1 英語能力の経年変化

小学校外国語活動を経験した学習者の英語能力の変化を明らかにするために、児童英検 GOLD の合計点と語彙・会話・文章・文字の各項目の小6と中1の点数について、 $t$  検定を用いて比較したところ、すべての項目において統計的に有意な差が見られた（表1）。いずれの項目も小6よりも中1の点数が有意に高くなっており、効果量も合計と文字が大、それ以外の項目が中程度を示している。したがって、小学校外国語活動を経験した学習者は英語能力が有意に高まることが示された。

表 1 児童英検 GOLD の記述統計と *t* 検定の結果

	学年	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>T</i>	<i>df</i>	<i>p</i>	<i>r</i>
合計	小 6	33.34	7.59	-10.83	192	.00	.62
	中 1	37.07	7.74				
語彙	小 6	9.35	2.38	-5.34	192	.00	.35
	中 1	10.17	2.34				
会話	小 6	5.72	1.82	-5.10	192	.00	.35
	中 1	6.35	1.87				
文章	小 6	11.20	2.69	-6.24	192	.00	.41
	中 1	12.27	2.93				
文字	小 6	7.07	2.40	-9.26	192	.00	.56
	中 1	8.27	2.17				

### 3.2 情意面の経年変化

小学校外国語活動を経験した学習者の情意面での変化を明らかにするために、質問紙の具体的心理傾向をたずねる 30 項目を用いて探索的因子分析を行った。その際、回答が 4 件法で行われていたため、カテゴリカル因子分析（重みつき最少二乗法；プロマックス回転）を試みた。また、小 6 と中 1 とで同じ因子を抽出するために、小 6 と中 1 の質問紙調査の結果を合わせて分析した。その際、どの因子にも貢献しない項目、因子負荷量が異常値と思われる値を示した項目等を除外した。その結果、17 項目が採用され、萬谷他（2013）で抽出された因子と同様の「自律志向」、「統合志向」、「関係性」、「遂行目標」の 4 因子を抽出した。萬谷他（2013）ではこれ以外に「非 WTC」、「内発志向」という因子が抽出されているが、本研究ではこれらの因子は抽出されなかった。

次に、小 6 と中 1 の心理傾向の経年的変化を比較するために、各因子の因子得点を用いて *t* 検定を用いて比較したところ、第 1 因子「自律性」、第 2 因子「統合性」、第 4 因子「遂行目標」で統計的に有意な差が見られた（表 2）。平均値を比較したところ、いずれも小 6 よりも中 1 の方が有意に高くなっているが、効果量はいずれも小程度であった。したがって、小学校外国語活動を経験した学習者の情意面の変化について、心理傾向の自律志向・統合性・遂行目標が高まることが示されたが、効果量が小程度であることから、それほど大きな高まりではない可能性が示された。

表 2 因子得点による小 6 と中 1 の比較

因子	種別	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>t</i>	<i>df</i>	<i>p</i>	<i>r</i>
第 1 因子 自律志向	小 6	-0.22	0.97	-4.25	369.16	.00	0.22
	中 1	0.16	0.79				
第 2 因子 統合性	小 6	-0.20	0.94	-4.25	368.74	.00	0.22
	中 1	0.17	0.77				
第 3 因子 関係性	小 6	-0.07	0.81	-1.49	384.00	.14	0.08
	中 1	0.05	0.77				
第 4 因子 遂行目標	小 6	-0.12	0.80	-3.31	384.00	.00	0.17
	中 1	0.14	0.74				

### 3.3 学習者の英語能力と情意面の変化との関係

学習者の英語能力と情意面の変化との関係を明らかにするために、小 6 と中 1 の児童英検 GOLD の合計点を基に、学習者の英語力を上位（小 6：*M*= 42.26；中 1：*M*= 45.10）・中位（小 6：*M*= 33.49；中 1：*M*

= 37.38)・下位 (小6:  $M=25.07$ ; 中1:  $M=27.07$ ) の3群に分けた。

小6・中1×英語力(上位・中位・下位)を独立変数, 因子分析で得られた各因子の因子得点を従属変数として2元配置分散分析を行った。第1因子自律志向について, 主効果の検定で, 英語力について統計的に有意な差が見られた, 効果量は中程度であった( $F(2,380)=7.27, p=.00, \eta^2=.06$ )。交互作用は見られなかった。英語力の3群を多重比較したところ, 上位群と下位群の間に統計的に有意差が見られ, 平均値を比較したところ, 上位群の方が有意に高かった(表3)。したがって, 英語能力の上位群の方が下位群に比べ自律志向が高いことが示された。

第2因子統合性について, 主効果の検定で, 英語力( $F(2,380)=7.84, p=.00, \eta^2=.04$ )で統計的に有意な差が見られたが, 効果量は小程度であった。交互作用は見られなかった。英語力の3群を多重比較したところ, 上位群と下位群と中位群と下位群の間に統計的に有意な差が見られ, 平均値を比較したところ, 下位群よりも上位群・中位群の方が有意に高かった(表3)。したがって, 英語能力の上位群・中位群の方が下位群に比べ統合性が高いことが示された。

第3因子関係性について, 主効果の検定で, 英語力( $F(2,380)=0.65, p=.52, \eta^2=.00$ )で統計的に有意な差が見られなかった。交互作用も見られなかった。したがって, 英語能力の3群について, 関係性に差がないことが示された。

第4因子遂行目標について, 主効果の検定で, 英語力( $F(2,380)=5.63, p=.00, \eta^2=.03$ )で統計的に有意な差が見られたが, 効果量は小程度であった。交互作用は統計的に有意な差が見られなかった。英語力の3群を多重比較したところ, 上位群と中位群との間に統計的に有意な差が見られ, 平均値を比較したところ, 上位群よりも中位群の方が有意に高かった(表3)。したがって, 英語能力の中位群の方が上位群に比べ遂行目標が高いことが示された。

表3 各因子における小6・中1の3群の記述統計

Source	N	第1因子 自律志向		第2因子 統合性		第3因子 関係性		第4因子 遂行目標		
		M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	
小6	上位	62	0.02	0.97	0.01	0.98	-0.18	0.86	-0.34	0.64
	中位	63	-0.26	0.96	-0.19	0.87	0.03	0.79	0.07	0.72
	下位	68	-0.41	0.95	-0.42	0.95	-0.06	0.8	-0.1	0.94
	合計	193	-0.22	0.97	-0.2	0.94	-0.07	0.81	-0.12	0.8
中1	上位	69	0.34	0.78	0.31	0.79	0.05	0.81	0.03	0.67
	中位	63	0.18	0.74	0.25	0.75	0.07	0.78	0.25	0.84
	下位	61	-0.06	0.81	-0.08	0.72	0.03	0.73	0.15	0.71
	合計	193	0.16	0.79	0.17	0.77	0.05	0.77	0.14	0.74
合計	上位	131	0.19	0.88	0.17	0.89	-0.06	0.84	-0.15	0.68
	中位	126	-0.04	0.88	0.03	0.84	0.05	0.78	0.16	0.78
	下位	129	-0.24	0.9	-0.26	0.86	-0.01	0.76	0.02	0.85

#### 4. まとめ

本調査の結果, 附属小学校外国語活動を経験した学習者の英語能力について, 統計的に有意に高くなっていることが示されたと共に, 情意面についても, 自律志向・統合性・遂行目標について統計的に有意に高くなっていることが示された。また, 英語能力と情意面の関係について, 自律志向と統合性志向は上位群の方が下位群よりも有意に高く, 遂行目標では中位群の方が上位群よりも有意に高いことが示された。また, 関係性については, 英語能力による差が見られないことも示された。

## 単語テスト分析結果

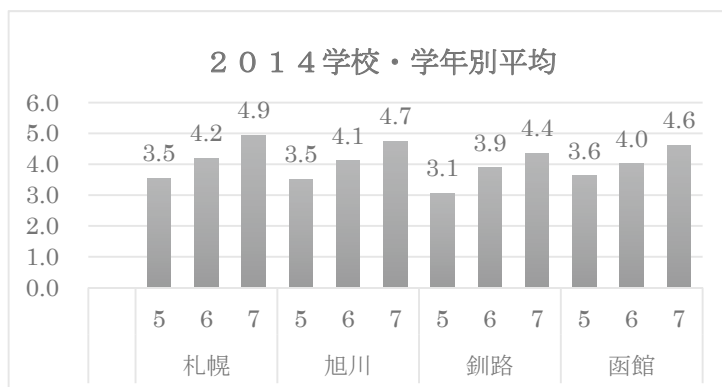
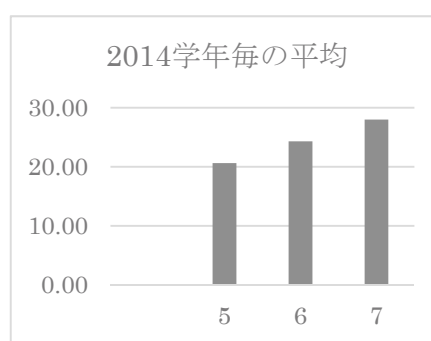
1. **対象者** 附属札幌・旭川・釧路・函館の5, 6年生及び附属中学1年生
2. **実施時期** 2013年度, 2014年度
3. **テスト内容・方法・分析方法**

音声・意味・文字のそれぞれの側面で語彙能力を測るテストで、6技能を測る計36問から成る多肢選択形式で行った。ただし、各年度で問題が異なっているものを行った、また、受験者の学年が異なっていることから、定点観測及び経年変化の比較は行っていない。

### 4. 結果と分析

2014年附属小校全体の合計平均で見ると、どの学年間でも有意な差が見られたことから、附属小学校全体として、単語力の伸長という点で指導の効果が見られたと言えるだろう。

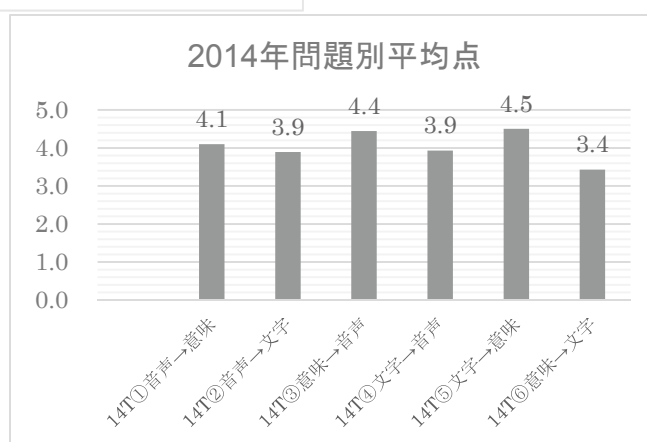
2014年学校別の合計平均で見ると、5年生では有意な差があるが、特に6年生で大きな差はな



い。釧路校では低学年・中学年で外国語活動を実施していなかったことを考慮すると、5年生から6年生にかけての1年間の伸びは大きい。遅く始めると発達速度が早いという先行研究の結果を裏付けるものである

と見ることもできる。

設問別平均点で見ると、②-④、③-⑤間以外は有意差がある。すなわち、文字・音声の組み合わせ問題、(意味が介在せず形式のみを扱う問題)は弱い。またスペリング問題も弱い。これは学校での学習の焦点事項ではないため、そのことが反映されていると言える。つまり、学習した内容の通りに、習得が進んでいるともいえる。



本報告書に記載されている内容は、学校教育法施行規則第55条の規定に基づき、教育課程の改善のために文部科学大臣の指示を受けて実施した実証的研究です。

したがって、この研究内容の全てが直ちに一般の学校における教育課程の編成・実施に適用できる性格のものでないことに留意してお読みください。

平成27年3月



北海道教育大学附属札幌小学校  
北海道教育大学附属旭川小学校  
北海道教育大学附属函館小学校  
北海道教育大学附属釧路小学校  
北海道教育大学附属札幌中学校  
北海道教育大学附属旭川中学校  
北海道教育大学附属函館中学校  
北海道教育大学附属釧路中学校